

文人実業家高橋義雄の生涯

中
川

清

目次

はじめに

- 一、時事新報記者になるまで
- 二、洋行
- 三、前期著述活動
- 四、三井銀行時代
- 五、三井呉服店への転出
- 六、経営改善
- 七、三井呉服店における宣伝活動
- 八、三井鉱山会社への転出
- 九、王子製紙への転出
- 十、実業界との訣別

- 十一、良き大正期ブルジョアジーの生活
- 十二、閑雅なる経済生活
- 十三、伽藍洞一木庵
- 十四、後期著述活動
- 十五、山県有朋との親交
- 十六、『大正名器鑑』と『近世道具移動史』
- 十七、息子忠雄
- 十八、晩年
- 終りに

はじめに

箒庵を号していた高橋義雄は、茶人そして茶道研究家として、大正期以降のわが国茶道史において重要な存在となっている。歿後五十年を経て、彼の『東都茶道記』全五巻、『大正茶道記』全三巻などが淡交社によって覆刻出版されているが、『大正名器鑑』全九冊、『大正茶道記』全七冊など、高橋義雄の数多くの著作は、大正期以降の茶道史及び茶器研究にとって貴重な資料である。

一方、実業家としての高橋は、三井銀行入行後、三井呉服店、三井鉦山の各役員を歴任したのち、王子製紙株式会社専務取締役（実際には社長職）に就任している。しかしながら、五十一歳（満年齢で五十歳）をもって実業家を引退し、茶道研究と執筆に専念することによって七十七歳の生涯を終えているが、まことに潔ぎ良い処世である。

高橋義雄は、明治十五年に設立されたばかりの時事新報に入社しており、帰国後は三井銀行に入行している。その後は、五年後には同社を退社して二年半にわたって欧米に遊学しているが、三井銀行に入行している。その後は、三井という大企業組織の命じるままに、三井呉服店、三井鉦山、王子製紙各社の経営者に転じている。これらの企業は、当時の三井にとっては新規事業あるいは傍系事業に位置づけられており、決して平坦な事業経営ではなかった。目まぐるしく子会社への転出をせまられる現代サラリーマンの原型を見る思いであるが、高橋自身は決して愚痴をこぼさず、彼が言う「実業奉公」に徹する姿勢をとっていた。勿論、心の底にどのような思いを抱いていたか知るよしもないが、以下の稿でみるように、あまり世事を気にしなかった性格であったと思われる。

ともあれ、勃興期から成長期にさしかかっていた明治後期経済にあって、銀行、商業、鉦業そして製紙業の各産業

部門を身をもって体験したのが、高橋義雄である。時代の流れとともに彼の事蹟を辿ってゆけば、わが国近代経営史の側面を知る上で興味深い証言となるだろう。

高橋義雄は、昭和十二年十二月十二日に七十七歳で歿しているが、その当時あつては可成りの長寿である。その二年前の昭和十年には、創元社から『茶道全集』全十五巻が刊行されているが、高橋箒庵（義雄）は編集顧問に名を連ねている。各巻とも八百頁に近い大冊であるが、高橋はその第一巻に「茶道正念」と「明治大正茶道逸話の中より」の二編を書いている。更に昭和十一年には、『茶道読本 改訂版』と『天正昭和北野大茶湯 古今茶道の対照』が、いずれも秋豊園出版部から出版されている。これらの著作は、七十五歳に近い年齢において書かれたものと思われるが、彼の頭脳が健康であつたことを示している。この事実からも、高橋義雄は極めて興味ある人物となっている。

高橋箒庵（義雄）は、自伝的随筆『箒のあと』上巻五一六頁、下巻五六五頁を残している。彼が七十二歳の年齢に達していた昭和七年六月十八日から都新聞に連載された随筆が、昭和八年に秋豊園から出版されたものである。高橋自身の経歴を中心に、知己を得た数多くの明治の政界及び実業界の著名人達、更には様々な分野の文化人の動向が詳細に描かれているが、明治・大正期の興味深い裏話が紹介されている。

以下の稿では、高橋義雄が残した数多くの著作の記述を参考資料としながら、彼の生涯とその時代を辿ってゆくことにする。なお、高橋の自伝的随筆である『箒のあと』には、時期の確定などに不正確な記述が多いので、いくつかの資料によって傍証することにした。また、以下の文中において特記されていない場合には、主として『箒のあと』からの引用である。

一、時事新報記者になるまで

五十歳になった高橋義雄は、王子製紙株式会社専務取締役（事実上の社長職）の椅子を惜し気もなく投げ捨て、自から望んで趣味と執筆の世界に入っている。こうした潔き良さは、彼が富裕な家庭、例えば地方の素封家の出身によるものではないかと、私は莫然と想像していた。しかしながら、自伝『箒のあと』に描かれている高橋義雄の少年期は、そうした想像とは全くの対極にあった。

高橋義雄は、文久元年（一八六二）、水戸市下市三ノ町に生まれている。水戸藩士高橋常彦の四男であるが、その生家は恐らく下級武士に属していたのであろう。幼時の最初の記憶として、水戸城下における天狗党の合戦騒動を記しているが、幕末の騒乱時代を体験していたことになる。

没落士族の家庭にあつて「非常の儉約」のなかに育っており、「三度の食事也大抵味噌汁と香の物で済ました」と、『箒のあと』のなかで回想している。九歳の頃には、水戸城下の家塾で漢学の手ほどきを受けているが、家計はますます苦しくなつていった。

十二歳の時には、「茨城県下多賀郡福田屋と云へる呉服荒物小売店の丁稚小僧に住み込ま」されることになった。「士族の子が町人に爲ると云ふ一身上の大変化」に直面し、「木刀ながらも腰に一刀を帶して居た身分が、之を捨てて丸腰と爲るのは、身を斬らるるよりも情なく、思ひ出しては落涙して居」た少年時代である。

十二歳の時から正味三年間の丁稚奉公であつたが、「慈母の奮闘」によって小僧の生活を終えることが出来た。しかしながら、「他人の飯を食つて人情の機微を知り、（中略）此田舎の雜貨店で習得した経験が、他日三越呉服店改

革に当たった時、尠からず役立った」と、『箒のあと』に記している。

こうして、水戸の学塾「自強舎」で漢学を学ぶ生活に戻ったが、同学者に終生の友となる渡辺治がいた。明治十一年（一八七八）、水戸上市師範学校内に中学予備校が新設されたため、高橋義雄は渡辺治とともに同校に入学している。その翌年には正式に茨城中学校として発足しているが、高橋らの第一期生は総勢二十五名ほどであった。その頃、わが国の中等教育制度は、まだ十分に整備されていなかった。足掛け四年間在学し、卒業を三、四カ月後にひかえながら、高橋は中学を退学して上京している。

明治十四年六月、高橋は渡辺治とともに慶応義塾に入塾した。その頃の福沢諭吉は、創設を予定していた時事新報の記者となるべき青年の養成を考えていた。たまたま、水戸出身の松本直己から故郷の「中学に文章を能くする青年」がいることを聞き及んだ福沢諭吉は、「水戸は光圀卿以来大日本史編纂に従事して大いに文章を奨励したから、今でも藩中に其（の）遺伝がある筈だ」と、水戸の青年達に期待を寄せることになった。その当時の諭吉は、「英人ガルトン氏著遺伝論を読んで大いに発明する所あり」と高橋が記しているように、新知識として遺伝学に関心を抱いていた。

こうして、高橋と渡辺、更には石河幹明、井坂直幹ら四名の青年が慶応義塾に入塾した。彼等は、諭吉から月額七円五十銭の学費が支給されていた。

翌十五年四月に慶応義塾を卒業した高橋義雄は、五月には渡辺治とともに時事新報社に入社しているが、同紙はその年の三月一日に創刊されたばかりである。時事新報の社長は中上川彦次郎であったが、その後の高橋の生活において二人はかかわりを持つことになる。そして、初任給十円の新米記者の高橋義雄が十月に執筆した論説「米国の義声

天下を振ふ」は、福沢諭吉の賞讃を得ることになったと『箒のあと』に記されている。

ところで、白柳秀湖『中上川彦次郎伝』（岩波書店 昭和十一年）には、時事新報時代の高橋自身の回想が紹介されている。インドシナ半島を巡って清国とフランスが戦争状態に入った一八八四年（明治十七年）当時、東京周辺の各地では「演説は大流行であった。中上川は高橋義雄等腕っこきの少壮記者両三名を率ゐて、（中略）招聘に応じて赴いた。演説会ではいつも高橋が前座を勤め、中上川が真打をやった」。なお、この個所の記述のあとに、（昭和十二年五月七日、赤坂一ツ木の邸宅にて高橋義雄談）と注記されている。

時事新報時代の高橋は、同社々員として最高位である百円程の給料を得ていた。福沢諭吉に好遇されていた高橋義雄であるが、「新聞記者として売文生活を続け」るのは、彼本来の趣味に反すると考えるようになっていた。自からの「作文趣味も衣食に事欠かずして、（中略）気楽に之を取扱ってこそ、大（い）に趣味を感じるもの」である。そして、私は一時実業界に寄り道して、生活の安定を得たる上にて、再び文芸生活に戻り、気楽に作文趣味を楽しむに若かずと、茲に新聞記者廃業の決心を固むに至ったのである」。

明治二十年五月、高橋は時事新報社を退社している。五年間に及ぶ記者生活にあって、高橋は六冊の著書を出版しているが、その詳細については、「第三章 前期著述活動」で触れることにしたい。

二、洋行

その当時の日本は、「一度洋行した者でなければ、同じ言ふ事でも人が耳を傾けず、同一学力で役人になっても、洋行した者と、せぬ者では、月給が半分も違ふと言ふような時勢であった」。そして「何をするにも、先ず一度洋行

して箔を付けて来なくてはならぬと云ふのが、当時の実情なり」と、高橋が洋行を決心するに至った経緯を回想している。

その頃、生系取引で巨利を得た下村善右衛門が生系の直輸出を計画しており、「先ず米国の状況を視察すべく、適當の人物を選んで彼の地に派遣しよう」としていた。こうして下村の資金提供によって渡米が可能となったが、福沢諭吉に相談したところ、「私を時事新報に留め置きたいのと、下村の資力が果たして其目的を達するに足るや否やを懸念されたので、容易に承諾を与へられなかった」。のちに諭吉の懸念は適中するのだが、高橋の熱意にはだされて、諭吉から「到頭許可を与へられた」。

渡米に先立って高橋は、前橋、富岡、上田、松本、諏訪などの生系生産地、更には横浜の生系取引状況を視察しているが、二十年九月ゲリック号にて米国に向かった。

翌二十一年（一八八八）九月まで、ニューヨークからハドソン河を七十マイルほどさかのぼったボーキプシーにあったイーストマン商業学校に在籍していた。その間、資金提供者となるべき下村の生系輸出計画は早くも挫折しており、滞在費の捻出に支障を来たすことになった。この事情を知った福沢諭吉からは、時事新報の通信員の名目で資金を援助することが申し入れられている。福沢の好意には深く感謝しながらも、これまでの経緯を考えると、その好意に甘えられる義理ではなかった。結局、旧水戸藩主徳川篤敬の資金援助を得ることになったが、その後ヨーロッパ滞在中、高橋が時事新報に寄せた原稿に対して、通信費が支給されている。

イーストマン商業学校を卒業した高橋は、ニューヨークを中心に商業視察を続けていたが、「フキラデルフキヤに赴いて其頃米国第一と云われたワナメーカー百貨店を視察した」。ここでは、「婦人の店員が大（い）に活躍するの

を見て」強い印象を受けている。「私が明治二十六年三井銀行大阪支店長時代に、始めて婦人を銀行の金銭出納係に採用し、又三井呉服店を改革して百貨店の端緒を開いたのも、皆な此のワナメーカー視察の結果が、偶然にも事実にはれた次第である」(『簪のあと』による。以下の引用も同じ)。

その年の五月には英国へ渡っているが、ロンドンとリバプールに滞在していた。そして、「リバプールの羊毛商で、日本名拳領事であったゼームス・ロード・ボース氏の賓客となった。ボース氏は非常な日本好きで、日本人と云へば、飲んで之を優遇する人であった」。その広大な邸宅の後庭には「私立日本美術館を設け、日本の七宝陶器等に関する大部の著述もあった」。

数カ月にわたるリバプール滞在中に、「ボース氏の日本美術論著述を手伝ひなどして、漸く日本美術に興味を覚えたので、私が後年美術鑑賞家となった萌芽は、実に此リバプール滞在中に発した者である」と述懐している。

ロンドン滞在中には、のちに陸軍軍医総監となり子爵に叙せられた石黒忠恵や、森林太郎(鷗外)あるいは、尾崎行雄、島田三郎などの興味ある人々と出合っている。

翌二十二年五月末には、パリに赴いている。「観劇と美術館巡りが、巴里滞在中半分以上の仕事で、リバプールに於て、萌芽を発した私の美術鑑賞病は、此時既に早や膏肓に入り掛って居た」。更に、ブリュッセルを訪れているが、「其頃益田太郎氏が在学中であった同府の有名なる商業学校やら、港湾の設備などを見物して、英国に引返し」ている。

実業家として、あるいは茶道を通して後年の高橋が親交を結ぶことになる三井財閥の実力者益田孝の嫡男が、太郎である。帰国後の益田太郎は、太郎冠者の筆名で新派や帝劇女優劇などの脚本を数多く執筆しており、高橋とも親し

い関係にあった。ところで、益田太郎がアントワープ（ブリュッセルではない）に遊学する時期は更に数年後である。

その年（明治二十二年）九月、高橋義雄は印度洋を経由して神戸に帰着している。関西では、山陽鉄道会社々長の中上川彦次郎と会っているが、かつての時事新報社長である。この時また、大阪毎日新聞社を営んでいた渡辺治とも旧交を温めているが、同じく時事新報時代の同僚である。その頃の渡辺は、「一廉の政治家と爲って」おり、「毎日新聞経営も、実は山県伯の後援に依る所ある事を知った」と高橋は記している。のちに、高橋義雄も山県有朋の知己を得て親交を深めることになるが、これについては改めて触れることにする。

東京に帰った高橋は、時事新報社の客員となり、欧米の見聞録などを同紙に執筆している。更に、洋行時の見聞に基づいて『英国風俗鏡』及び『商政一新』を刊行している。

「欧州滞在中、彼の国々の商業組織を調査し」たが、「政治のみが立憲と爲っても、経済機関が之に伴はなければ、円満なる国家の進歩を期することを得ぬ」と、高橋は『箒のあと』に記している。こうした考えから、『商政一新』を著わし、「商業会議所、商工組合、信用興信所、其他商業機関を改善する方法を詳述した」のである。

この著述は、当時の「経済社会の革新運動に向はんとする機会に投じて、各方面に相当の反応を現はし来り、親友渡辺治が之を井上馨に提示するや、伯（井上馨伯爵―引用者）は之を通読して（中略）商政一新は旧幣を説くと同時に之を救済する方法を示して居る」とて、「殊の外賞讃せられたさうで、伯が私を知られたのも実は此商政一新のお陰であり、山県伯が明治二十三年商業会議所條例を規定せられた時、私に諮問する所があったのも、亦之を信用せられた爲めで、此書は私の一身上に取りて、頗る有利なる効果を生ずる事と爲ったのである」（『箒のあと』による）。

一方、その年の十二月中旬から翌二十三年一月十日頃まで、日本郵船会社副社長吉川泰次郎に伴われて、高橋は大

阪に旅行しておりこの時に井上馨の面識を得ている。

帰京後、高橋を日本銀行に入行させようと考えていた吉川は、川田小一郎総裁との面接を幹施している。しかしながら、高橋は川田総裁に好印象を抱かず、日本銀行への就職は実現しなかった。そしてこの年（明治二十三年）、高橋義雄は、小野光景を中心に横浜の実業家が経営する横浜貿易新聞の主筆になっている。

三月には、既に面識を得ていた井上馨を私邸に訪問している。井上邸では、通された客間の床に掛けられていた「仏画の前に坐って、之に見惚れていた処へ、井上侯が入り来って、君はそんな物が好きなのか、と不思議な面持ちをすると同時に、又大（おおい）に話せる奴と言はぬばかりに、非常に好意を以て私を迎へられた」。

こうして、井上の氣に入られた高橋に対して、「私の嫁に或る知名な実業家の娘を媒酌しやうと申立」られている。折角の井上馨の好意であったが、「先方に先約があったので、其伉立ち消えと爲って仕舞」う結果となり、高橋は明治二十四年四月に山口県人長谷川方省の次女千代子と結婚している。

それでも、井上は「何か私を世話して遣らうと思はれた者か、其頃侯が三井家主人より、同家財政改革新の事を依頼されたのを幸ひ」に、後述するように高橋の三井入りが実現している。

この頃の高橋は、山県有朋とも面識を得ている。元来、山県は「容易に其腹心を示さぬ方であるのに、君に対しては、珍らしく初めより十分に談話したらしい」と、山県にも最初から好印象を抱かれた経緯が、井上馨の言葉として『筈のあと』に記されている。そして、「是れが山県公と私の初対面で、最初に於ける感じが好かった爲めか、其後公とは、公私上事を共にする何等の必要もないのに、交際は始終継続して、晩年になる程倍々濃厚になったのは、一種の合性とても云ふものであらう」と、高橋は述懐している。

ところで、岡義武『山県有朋』（岩波新書 昭和三十三年）は、簡潔にまとめられた伝記である。ここでは、高橋義雄の見聞が再三にわたって引用されているが、更に、山県に関する代表的な資料として、『山公遺烈』（大正十四年）と『萬象録』が挙げられている。それまでに高橋箒庵（義雄）が刊行した『東都茶道記』、『大正茶道記』あるいは、彼が記した膨大な日記『萬象録』のなかから、山県公に関する記述が、『山公遺烈』に再録されている。この頌記は、山県有朋の歿後間もなくの刊行である。

さて、井上馨もまた、高橋義雄をしばしば「自邸に招いで、我が国財政に関する既往の経験やら、将来の方針やらに就て、談論せらるる事があった」。そして、井上と関係が深かった三井はその当時「腐蝕したる大木の如く、動（や）もすれば崩壊せんとする情態であった」。

こうして、井上から勧誘された高橋は、「三井の家運挽回に就き、一臂の力を効す事を得るは、頗る面白い仕事だろうと思つて、その申し入れを「快諾」した。井上の幹施によって、澁沢栄一及び益田孝と面談したのち、「明治二十三年十二月二十日頃」、澁沢と益田は「三井関係の実業家連中十数名を会合した席上に私を招ぎ、欧米商業視察談を請はれた」。高橋は、これを「三井入りの試験」と記しているが、その一週間後には澁沢に同道されて総長三井高喜、副長西邑帛四郎らと面談している。

欧米遊学に際して費用の捻出に苦勞した高橋であるが、その背景に多分に功利的な意図があったことは、『箒のあと』にも記されている。そして、洋行帰りの新知識として、高橋義雄は三井に迎えられているので、欧米遊学の目的は充分に果されたとと言えるだろう。更に、ヨーロッパ滞在中に美術に対する関心が大きく刺激されたことは、高橋の後半生に重要な意味を持つことになっている。

三、前期著述活動

高橋義雄は、その生涯を通じて生前に六十点を越える著作を公刊している。彼が本格的な著述生活に入るのは明治四十四年に実業界と訣別してからであるが、以下の稿では便宜的に実業界入り前後迄の時期を前期著述活動、実業界を辞してからの時期を後期著述活動に分けて考察したい。なお、後期の著作活動については、第十四章で触れることにする。

(1) 『日本人種改良論』 (明治十七年九月刊)

福沢諭吉が序文を寄せているが、高橋義雄の処女出版である。全文百三十七頁のこの本の発行人は、石川半次郎となっている。混血による「日本人種改良論」に対して、加前弘之との間に論争が展開されている。⁽¹⁾

(2) 『拝金宗』 (明治十九年九月刊)

表紙には「一名 商売のススメ」の傍題とともに、“The money is mightier than the sword”と英文タイトルが記されている。緒言には、「本書は“The worship of the all mighty money”の英語より思ひ当りて拝金宗と名づけ」と書かれている。なお、all mightyは正しくはalmightyであるが、「オールマイティー・ドルラル」即ちalmighty dollarの訳語である「拝金」は、「私の発明である」と『箒のあと』に記されている。

中上川彦次郎が序文を寄せているこの『拝金宗』は、本文百五十頁であるが、次のような構成になっている。

第一章 金銭の勢力

第二章 土人帰商の必要

第三章 企業的事

第四章 投機的事

第五章 商業家の心得

題名は『拝金宗』であるが利殖の道を説いているのではなく、新しい時代における「商業家」の方向づけを示したのが、この本である。出版者は、神戸甲子二郎と大倉安五郎の両名である。

(3) 『拝金宗 第二編』（明治二十年四月刊）

前著の翌年に発行されているが、本文百四十四頁のこの書の構成は次のようになっている。

第一章 商人の教育

第二章 商人の習慣

第三章 商人の能力

第四章 資本、組合、商店の事

第五章 人を使ひ客に接する事

前著に続く、新時代の商人論であり、企業組織についても触れている。

なお、『籌のあと』には、幕末から明治期を生きた異色の浮世絵師河鍋曉斎が表紙を描いた「此書は上下二巻共に数千部を発行した」と記されているが、この『第二編』の奥付には、定価四拾五錢と記されている。

(4) 『梨園の曙』（明治二十年二月刊）

表紙には、「一名 西洋演劇脚本」とあり、更に、

英国法学士技芸士 末松謙澄総評

日本演劇改良学会員 高橋義雄纂訳

と記されている。

英国演劇の脚本の翻訳と思われるが、本文二百三十二頁の本書には、次の四編が収められている。

「洋琴調子整」(ヘンリー・イ・ジョンズ)

「恋衣乾ぬ間の渚」(ソーン)

「ガイフオークス地雷火奇譚」(マクハーレン)

「女権拡張情理岐」(ハルマー)

巻頭には、ヨーロッパの劇場及び舞台の石版画写真が収められている。しかしながら、「洋琴調子整」の登場人物が、お純、松蔵などと日本人の名前に換えられているように、ヨーロッパ演劇の雰囲気とはほど遠い内容である。

ところで、高橋義雄の肩書に「日本演劇改良学会員」とある。明治十九年八月、のちに伊藤博文の女婿となる末松謙澄の提唱によって設立されたのが、この日本演劇改良学会である(正しくは演劇改良会)。新しい演劇の導入、劇作家の地位向上、近代的な劇場の設立などが、演劇改良会の設立目的となっていた。伊藤博文のお声がかりもあって、井上馨、依田学海、福地桜痴、森有礼、澁沢栄一など各界の有力者が主要会員である。また、賛同者には大隈重信、西園寺公望、陸奥宗光、三井養之助、大倉喜八郎、益田孝など政界及び財界の有力者が名を連ねている。

ちなみに、この『梨園の曙』の奥付には、次のように記されている。

著述兼出版人 茨城県士族 高橋義雄

東京京橋区銀座二丁目拾四番地

発兌

金港堂原亮三郎

(5)『通俗日本農業教育論』（明治二十年三月刊）

熊倉功夫ほかの校注とともに淡交社から覆刻出版された高橋箒庵『東都茶会記』（平成元年）の巻末には、「高橋箒庵略歴および著作年譜」が収められている。そして、明治二十年の項には『通俗日本農業教育論』金港堂が挙げられている。

この章でとりあげられている高橋義雄の著作のうち六冊が、国立国会図書館の蔵書に入っているが、この『通俗日本農業教育論』だけが所蔵されておらず、筆者は未見である。なお、この書が刊行されて二ヵ月後に、高橋は時事新報社を退社している。

(6)『日本商業教育論』（明治二十年六月刊）

本文僅か六十一頁のこの小冊子は、前著の『通俗日本農業教育論』とともに、『箒のあと』では全く触れられていない。

「堅気の商人は、学問は一家破滅の基にして、学者の真似事を爲したらんには忽ち身代を失ふべし」と考えられていた時代にあつて、商業教育の重要性を説いたのが本書である。

そして、「近来世事複雑にして商売上の関係は益（ますます）広まり、昔の世事商売の簡単極りたるの比にあらず。且つ、外国貿易ますます開け（中略）欧米諸国の外国人に接して其向きの商売取引を爲さざるべからず時勢」である

として、外国貿易の必要性を訴えている。

更に、「第三章 商人の教育は実物教育ならざるべからず」の題目で、米国の教育を例にひいて、商業学校教育のあり方について説いている。

『日本商業教育論』が刊行された明治二十年当時にとっては、我国においても近代的な商業教育が新たな一歩を踏み出した時期である。

明治八年に銀座尾張町の鯛味噌屋の二階に誕生した商法講習所は、明治十七年には農商務省の所轄に移されており、東京商業学校と改稱している。そして、明治二十年には高等商業学校と名を変えているが、明治三十五年に神戸高等商業学校が開設されるとともに東京高等商業学校となった。現在の一橋大学の遠い源流である。

『日本商業教育論』の記述は、今日では目新しい内容ではないが、当時にとっては充分に先駆的な主張であったと言えるだろう。

前述の「高橋箒庵略歴および著作年譜」並びに『国立国会図書館明治期刊行物所蔵目録』には、「通俗日本商業教育論」と記載されているが、原本の題目には「通俗」の文字はない。なお、『梨園の曙』及び『通俗日本農業教育論』と同じく、この書も金港堂から出版されている。

(7) 『英国風俗記』 (明治二十二年十二月刊)

既に記したように、この書は、翌二十三年に刊行された『商政一新』とともに高橋義雄の洋行帰国後の著述である。見開き扉には「准亭居士著」と記されており、緒言には「其見聞感覚を写して小説とも附かず紀行とも附かぬ種の記録を作らんとし」とある。本文の導入部分も、船中の状況を小説仕立てで記述しているが、頁を追うにつれて英国

の風俗と社会事情が詳細に紹介されている。二七八頁に及ぶ本文には、次の項目がある。

グラッドストン氏の旧宅

貴族音楽会

貧富

寺院

家庭教育

贈答

エデンバラ府

府知事接客会

英国生計問答

例えば、「府知事接客会」では、州知事主催パーティーの状況を説明しているが、「西洋人は居家処世金を使ふ」と巧みにして」と、英国人の合理性を指摘している。

なお、この書の奥付には次のように印刷されている。

著作者 高橋義雄

京橋区築地三丁目九番地

発行者 大倉安五郎

日本橋通壹丁目十八番地

(8)『商政一新』(明治二十三年五月刊)

扉には、

一部五章八萬言

東京書林 大倉発行

とあり、更に、

英国新聞倶楽部名誉会員

英国商業学校会計師 慶応義塾評議員

交詢社議員 横浜貿易商組合顧問

時事新報記者

と、著者高橋義雄の肩書が列挙されている。

この『商政一致』については、「第三章 洋行」の項でも触れているが、重複を避けて以下にその内容を紹介する。
扉には「八萬言」とあるが、本文二百五十六頁は次の五章によって構成されている。

第一章 商業立国之事

第二章 商業仕組之事

第三章 外国貿易之事

第四章 工芸奨励之事

第五章 貿易中心之事

翌明治二十四年一月に三井銀行に迎えらるるに当って、この著述が大いに役立ったと、高橋義雄は『箒のあと』に記している。確かに、『商政一新』は欧米商業事情の単なる紹介ではなく、高橋の見聞に基づく積極的な提言を記している。

同書の第二章及び第五章では、貿易の必要性が強調されているが、日本とアジア諸国間の雜貨品の運賃が当時の料率をもって具体的に記されている。

また、ベルギーの輸出入総額が十二億二千四百五十万円に達しており、同国の「貿易高を其人口に割附くれば白耳義（ベルギー引用者）は一人に付き二百円内外にして和蘭国を除くの外、世界共に匹敵す可きもの見ず。然るに我が日本国は明治二十一年の総貿易高一億三千万円に過ぎ之を人口に割附くば僅々三元少余にして殆んど面目なき次第なりと云ふ可し。扱て彼の自耳義国の貿易上二億九千五百万円は通過商品と云う」と記している。いまだ工業化されていない日本は、ベルギーと同じように貿易立国を目指すべきであると言うのが、高橋の主張である。

四、三井銀行時代

明治二十四年（一八九一）一月一日、高橋義雄は三井銀行に入行している。三井銀行の実務上の最高責任者であった「西邑（厩四郎）は私を客分扱ひにして、自身の机と鍵の手形に、私の机を並べて着席せしめたが」、そこは「大元締」と稱されていた「三井の重役室」である。高橋は、「出勤当日より銀行の諸規則を研究し、凡そ一ヶ月半許（ばかり）を経て略ぼ銀行の内情が分った」と、『箒のあと』に記している。

武内成『明治期三井と慶應義塾卒業生』（文眞堂 一九九五年）には、『慶應義塾塾員・学生姓名録』、『三井事業史』、『三井銀行職員録』などの資料に基づいて作成された「表2 三井銀行における慶應義塾卒業生」が示されている。同表の高橋義雄の項には、「明治二十五年三月一日 秘史係長、営業臨時整理事務係長」の職名が記されており、給料は六五円である。

白柳秀湖『中上川彦次郎傳』（岩波書店 昭和十五年）所収の「中上川彦次郎年譜」によれば、明治二十五年十月六日に三井銀行「本店庶務課及び私史係を廃し、記録係及び信用係を置く」とある。ここでは、「秘史係」でなく「私史係」となっているが、のちに「記録係」と改められているように、三井家及び三井銀行関係の史料編纂係であろう。「営業臨時整理事務係長」の職務については後述する。

一方、入行間もない高橋は、「三井家憲制定案」に関する調査を井上馨から依頼されている。丁度その頃、三井銀行を中心とする三井家の企業グループは、組織の明確な成文化に着手していた。三井文庫編『三井事業史 本編第二編』（一九八〇年）の「第六章 三井家政改革の展開」には、「高橋義雄の入行」の見出しとともに次のように記されている。

「三井家の家政改革を実行するにあたって、井上馨がまず強く主張したことは、家憲を制定することと、三井銀行の資産・負債についての詳細な調査であった。そしてこれを行うための人材として、高橋義雄を推挙した」。

主として、『三井事業史 資料編三』（一九七〇年）を参考に、三井家をめぐる当時の状況を辿ってみると次のようになる。

明治二十四年十二月三十日、「三井物産会社、三越呉服店ヲ三井家ノ財産ニ編入スルヲ可トスルニ付キ、此決議ヲ

同族会議「通牒」されている。それまで三井系企業グループ内にあって傍流的存在であった三井物産と三越呉服店が、この時、三井の直轄商店に編入されることになった。

明治二十五年二月十八日には、「三井銀行二関スル件」が決議されており、総長三井高保、副長中上川彦次郎、監事に西邑庸四郎、益田孝、斎藤専蔵の三名、そして囑託監事に三野村利助が委嘱されている。事実上の最高責任者に就任した中上川は、その前年八月に三井銀行に入行したばかりであるが、時事新報時代にひき続いて高橋義雄の上司である。

明治二十六年には「三井組内規」が定められており、その第二条は、総長一名、参事無定、理事一名乃至二名以上をもって重役と規定している。更に、第五条には「理事ハ雇員ヨリ選任ス」とあるが、三井家同族を除いた役員及び従業員はすべて「雇員」である。

同じ二十六年七月一日には商法が施行されているが、このため三井系各社（「商店」と称されていた）は合名会社組織に改組されている。即ち、三井物産会社、三井鉱山会社、三井銀行はいずれも合名会社となった。そして九月には、三越呉服店が改組されて合名会社三井呉服店となった。

同年十二月には、「三井家同族会規則」が明文化されているが、補足第二十六条には「此規則ニ於テ三井家同族ト稱スルハ、先祖三井宗寿居士ノ苗裔タル三井十一家ヲ総稱スルモノニシテ」と規定しており、三井八郎右衛門を筆頭に十一家の各当主名が記載されている。

こうした状況のなかで、高橋義雄の動きはどうなっていたかを、次に辿ってみよう。

明治二十四年四月、読売新聞紙上に三井銀行、第一銀行などの経営状態が著しく悪化したと報道されている。莫大

な不良債権を抱えていることが伝えられたのであるが、このため、三井銀行京都支店で取付け騒ぎが発生した。日本銀行の支援を得るとともに、事態の鎮静化が図られた。新聞記者出身である高橋は、「斯かる時節こそ、一手柄頭はすべき」と、「新聞方面に奔走して諒解を遂げ」ることが出来た。

こうした事情もあって、入行後五カ月が経過した高橋は、「銀行部内に整理係と云へる一部局設置の事を提案した」。そして、その年の「七月四日に至って、遂に滞貨整理係が成立、三井三郎助氏が係長、私が其次長となった」。不良貸付は積極的に回収されることになり、貸金の抵当に入っていた美術品は道具入札にかけられ、代金回収に充当された。

美術品、道具類を取扱うのが仕事であったことから、「私の道具鑑賞眼は（中略）大いに進み、茶事の興味も亦倍加して、到頭病膏盲に入るに至ったのである」。後年、茶人そして茶道具研究家として知られるようになった箒庵高橋義雄の出発点は、ここにあったのだろう。

同年（明治二十四年）八月には、山陽鉄道会社々長を辞した中上川彦次郎が、三井銀行理事として入行している。しかしながら、三井銀行には「中上川氏に知り合ひの人なく、且つ同氏の入行を歓迎する譯でもないから、私の外に出迎人もなかった」。井上馨の要請もあって三井入りした中上川であるが、新橋停車場で出迎えたのは、時事新報時代の下僚であった高橋義雄ただ一人であった。

一般行員からは歓迎されなかった中上川彦次郎であるが、最初から二百五十円の高給をもった遇されていた。ちなみに、同年入行の高橋義雄の給料額は六十五円であり、二年後に大阪支店支配人に任命されて百五十円に昇給している。その頃、慶応義塾を卒業して三井銀行に入行した新社員の初任給は三十円程度であったことを思えば、高橋も

また高給をもって遇されていた。

その年の十一月、三井銀行副長西邑帛四郎は、取付け騒ぎの責任をとった形で職を辞したいと申し出た。井上侯爵の要請もあり、西邑は形式的にその職にとどまるが、中上川は三井銀行の実務上の最高責任者となり、翌二十五年には正式に同行の副長に就任している。中上川は、更に三井鉱山及び三井銀行の理事三井呉服店調査委員、三井大元万参事、鐘ヶ淵紡績取締役を次々と兼任しており、やがて三井における「中上川時代」が到来する。

三井銀行に入行した中上川彦次郎は、不良貸付の大整理に着手するとともに、多方面にわたる改革を積極的に推進している。「壮年気鋭精力の最も充満した時代」にあった中上川について、「随分過激に遣っつけて居てハラハラするやうな事もあった」と高橋は記している。

明治二十六年五月、高橋義雄は三井銀行大阪支店支配人（支店長）を命じられているが、「関西方面の采配を振って貰いたいと云ふ」中上川の要請によるものである。その当時の職制として大阪支店支配人は、「名古屋以西、京都、大阪、神戸、広島、下関、福岡、長崎諸支店の総監督で、云はば三井の関西探題と云ふべき任務を帯び」ていた。このため、「京都を振出しにして長崎の果まで巡廻し」ている（以上の引用は、いずれも高橋義雄の自著『籌のあと』による）。

慶応義塾を卒業した小林一三は、その年（明治二十六年）の四月に三井銀行に入行しており、九月には大阪支店勤務を命じられている。のちに阪急・東宝グループを統帥して関西を代表する実業家となり、茶人としても知られた小林一三は高橋義雄に私淑していたが『逸翁自叙伝』（阪急電鉄株式会社 昭和九十四年）に次のように記している。

「その頃、三井銀行大阪支店長高橋義雄氏は、銀行に出勤する平素の服装は和服で、折鶴三つ紋黒縮緬の羽織といった、役者のやうに美男子であった。出勤すると毎朝手紙ばかり書いて居った。巻紙に麗筆をふるふのである。（中略）

それは毎日の出来事を明細に、東京の中上川専務理事に報告してゐるのである。

高橋支店長の仕事は、銀行のことよりも、大阪経済界の情勢を東京に速報することと、花街の交遊に消閑されることであつた。

元來が経済人としては、俗人ばなれがして居た。後年（中略）、茶道の指導者であり、謡や、能や、東明ぶしの家元として等々、一生を風流才人で終ったくらゐであつたから、銀行の支店長として預金増加の運動や得意先との交渉には頗る無頓着であつた」。

明治二十九年末、その頃三越呉服店専務理事の職にあつた高橋義雄に対して、小林一三は三井銀行東京本店への転勤が実現するよう懇願している。

これに対して、翌三十年一月十九日付の小林宛の書簡で高橋は次のように記している。「上柳支配人並に本店秘書課へも一応相談」したものの、「本人の言ふが假に相成」るのは、人事政策上好ましくないもので、結局、小林は「名古屋店話」となつた。しかしながら、「貴下は我假なる人物なりとの評あり（中略）今日の挙動の如き決して再びすべからざる事と存候」と、たしなめている。

一方、小林は「この手紙は私の守り本尊として秘藏して来た二つの書状の中の一つであり、〔後年東京弦月庵に於いて、この手紙を表装した一幅をもって、（高橋）箒庵先生を主客にして一会の茶席を催し、その高恩を謝し得たことは嬉しい思ひ出である」と、『逸翁自叙伝』で語っている。

この辺の事情について、高橋は『箒のあと』に次のように記している。

「当時の旧友中で出世の最も素晴らしいのは今の阪急社長、東電副社長と云ふ東西実業界を股に掛けた一方の驍將小

林一三君である。（中略）（小林）君は当時三井銀行大阪支店員であったが、偶（たまた）ま上京して、私を訪はれたので、私は君に対して卑見を述べ、今後若し実業界に雄飛せんとするならば、余り其前程を急がず、翼の十分に成るまでは、暫く安全の処に居る方が宜からう、と言った一言に感じて、君は北濱銀行行きを思ひ止まったと云ふ事で、（中略）昭和六年暮、当時私より君に送った勸告書簡を表具して、麴町永田町寓居伝月庵の床に掛け、極めて興味ある記念茶会を催された」。

一方、小林は

「明治二十九年頃と記憶する。岩下清周氏が北浜銀行を設立する時にも、三井銀行堂島支店の小塚正一郎と共に行くべき運命であったが、（中略）三井呉服店専務理事であった高橋義雄氏から訓戒を受けて名古屋支店に左遷され」と、昭和二十六年十月の産業経済新聞に連載された「住友家と私」と題する文章に記している。

ここに出てくる岩下清周は、高橋の後任者として三井銀行大阪支店長に就任したものの、間もなく三井を辞しており、明治三十年に北浜銀行を設立している。一方、小林一三は明治四十年に三井銀行を退職し、箕面有馬電気軌道株式会社専務取締役就任しているが、のちに大きく発展する阪急電鉄グループの原点である。

ところで、高橋義雄の大阪支店在勤中、土地の旧家「長田作兵衛の所蔵道具が抵当流れと爲つた。」た。「之を売却すれば、大方十萬円内外に過ぎぬであろう。三井も今や整理が緒に就き、（中略）本邦名家の家格上、相当の書画器具を所蔵せねばなるまい」。即ち、三井家にて買取り、所蔵するのが「名器保存の長策ならんと、長々と意見を書き綴った」が、その宛先は直属の上司である中上川彦次郎ではなく、三井物産会社首脳の益田孝である。こうして、長田家所蔵の美術品は、幸いにも「分散せず、三井同族中に留め置く事を得たのは、其頃私の脳中に萌し始めた、道具愛好

心の発動に依るもので」あると、『箒のあと』に記されている。のちに、茶道及び美術収集を通じて益田孝と高橋の交友が深まるが、ここにその源流があったと言えるだろう。

更に、その頃の高橋は「明治二十七年、大阪の三井銀行支店に、女子店員を採用する新案を試験した」。ワーナー・メーカー百貨店で女子店員が働いていた姿が、滞米時代の高橋に強い印象を与えたことは前述の通りであるが、「日本に於ても、商店に婦女子を採用する習慣を作らなくてはならぬと云ふ感想」に由来するものである。こうして、「年齢十六、七歳より二十五歳までの女子で、小学校卒業以上の学力ある者を募集し、(中略)珠算やら紙幣勘定やらに熟練せしめんとし」た。最初は七、八名を採用したが「其成績案外に好く、紙幣勘定を男店員と比較せしに、女子の方が遙に正確で敏捷であった」。

一方、男子行員からは、「女子の髪の匂ひが鼻について困ると云ふやうな苦情を生じたので、(中略)欧米諸国の実況を説き、日本に於ても国家経済の見地より、大(おお)いに女子職業の発展を謀らざる可らず」と、女子行員の採用を実施した。折角の試みであるが、婚期に及んで退職する女子が多く、高橋が「大阪支店を引揚げた後は、余り永く継続しなかった」⁽²⁾。

しかしながら、こうした「新案を大阪三井銀行支店に試みたのが評判と爲り、高橋は西洋帰りの新人で、種々の新工風(工夫)を爲す男だから、此時問題と爲って居た三越呉服店改革の適任者であらうと、三井幹部の意見が一致し、私は三井理事の資格を以て、三越呉服店改革の衝に当ることになったのである」(『箒のあと』)。

こうして、高橋義雄が三井呉服店理事に転じたのは、明治二十八年(一八九五)七月である。⁽³⁾

五、三井呉服店への転出

元来、呉服業は三井家の伝統的家業であるが、幕末期以降営業不振が続いていた。明治五年には大蔵省の強い要請があり、三井大元方から呉服業が分離されたのは、金融業の経営強化のためである。この時、従来の越後屋呉服店から三越得右衛門名義に変えられている。そして、明治二十六年七月には、越後屋から合名会社三井呉服店に改組された。

ところで、明治二十七年二月八日付の「三井家同族会議議事摘要」には、「三井家監査役、三井元方、地所部、工業部、三井銀行、鉱山会社、物産会社、呉服店ノ役員ヲ左ノ如ク任命スベキニ決ス」と記されている。先ず、三井家全企業を中心となる三井元方の構成役員は、次の通りである。

総長 三井八郎右衛門

専務委員 三井八郎次郎

委員 中井三平 西邑庸四郎 益田孝 中上川彦次郎

そして、合名会社三井呉服店の役員は、次のように構成されていた。

社長 三井源右衛門

専務元締役 藤村喜七

元締役 三井得右衛門 山岡正次 馬越恭平

当時の三井各社の役員は、「理事」の職名がつけられていたが、三井呉服店では「元締役」という古風な肩書が用

いられていた。

一方、高橋義雄が三井呉服店に転じた翌年の明治二十九年八月三十一日には、「三井商店理事会内規」が制定されている。その第一条に、

「三井商店理事会ハ三井銀行、三井物産会社、三井鉱山会社、三井呉服店、三井地所部及び三井工業部（以下各商店ト称ス）ノ業務ニ付評議ス」

と記されている。

そして、第二条には、「理事会ノ役員ハ三井同族会ニ於テ各商店ノ重役中ヨリ専任ス」と定められており、三井家各社の実務上の最高責任者である理事に、次の七名が選任されている。

西邑庸四郎 三井地所部理事

益田孝 三井物産合名会社専務理事

中上川彦次郎 合名会社三井銀行専務理事

団琢磨 三井鉱山合名会社専務理事

上田安二郎 三井物産合名会社理事

朝吹英二 三井工業部理事

高橋義雄 合名会社三井呉服店理事

（三井文庫編『三井事業史 資料編三』による）

三井呉服店に転じた経緯について、高橋自身は『箒のあと』に次のように記している。

「（その頃）三井幹部に於ては三越呉服店を如何にすべきや、如何に先祖伝来の事業なりとは云へ、三井とも云はるる者が今日に於て、呉服小売店を経営し居るのは、少しく時勢後（おく）れだろう、と云ふ議論が持ち上った」。

近代化しつつあった三井の体面に合わせて、三井呉服店の改革が必要とされていた。そのためには、「大阪三井銀行支店に於て、最初に女店員を試みた」高橋を「呼び迎へて、其改革を委任したら宜からうと云ふ」ことになった。

高橋としては「三井銀行に勤務する方が、仕事も立派だし、世間体も上品であるが、（中略）新時代の要求に応じ、日本の小売法革新に、我が刀を試みて見やうと思った」（『箒のあと』）。

六、経営改革

明治二十六年に合名会社に改組されたものの、旧態依然の経営が行われていた三井呉服店では、高橋義雄は先ず「商品陳列の方法」を改革している。また、従来の大幅帳では「仕入と売上との勘定が明確ならず」、在庫品や商品の紛失についても「之を知る事甚だ難し」と断じている。「又番頭の給料が少額にして、實際生活に堪えざるが爲め、商品を胡魔化すを以て常習とし」ており、「文明流商売法」とはほど遠かった。

「最初に改革の鉄腕を下すべきは、帳簿と店売との二点なりと心付き、着々之に取掛った」と『箒のあと』に述懐されているが、我が国における最初の近代的な百貨店が、こうして高橋義雄によって着手されることになった。

子飼いの番頭や店員にとっては、「呉服小売などに何等の経験もないモダン書生が突然店内に飛び込んで来て、我々を指図するとは何事ぞやと、心中不服であったのは当然である」。小売業もまた近代化されるべきであるとの信念を

持っていた高橋は、東京商業学校（のちの東京高等商業学校）、慶応義塾などの学卒者を積極的に採用した。また、従来の大福帳を近代的な簿記に改め、更には「多数の学生を見習として売場、仕入場へも」配置している。

陳列場の配置も変え、「客の自在に選定するに委せているが、当時にとっては改新的な販売手法である」。また、「呉服模様意匠の改良」のため、「新に意匠部と云へる一局を設け」ている。こうして、「旧式呉服店に対して破天荒なる改革を行ひ」、更には「女店員を採用するなど、我が呉服小売法に大改革を起したのであるから、一時旧店員を驚かして其反抗を招いたのは、誠に当然の成行であろう」（『籌のあと』）。

今日から見れば当然と思える改革も、当時にとっては余りにも急進的であったのだろう。明治三十一年二月には、解職された元売場係長らによって越後屋商店が結成され、三井呉服店を中傷している。更に四月には、陳列場係長を中心に数十名が同盟欠勤に及ぶというストライキ騒ぎが発生している（『株式会社三越 八十五年の記録』平成二年刊）。

同年四月十五日開催の三井商店理事会議事録には、「高橋呉服店理事発議」として、「店員ノ処分ニ関スル件」が次のように報告されている。

「（前略）今回同罷行ケ間敷キ挙動ニ出テ、又御覧ニ供セシ如キ書面ヲ社長ニ提出スルニ至レリ（中略）。若シ同盟者中尚ホ引続キ欠勤スルトセバ（中略）誠ニ穩カナラザルノ行爲ニ付、無論解備致シタク。右ハ何レモ月給三拾円以下ノ者ナレバ敢テ理事会ニ提出スルヲ要セザレドモ、或ハ多人数ニ互（わた）ルヤモ難斗（図り難き）ニ依リ予メ御評議ヲ仰グト陳述アリシ処、後來如此余弊ヲ遺棄セザル様断然タル処分ヲナシ可然ト決セリ」（『三井事業史 資料篇四上』一九七一年刊）。

同年七月二十二日には、社長三井得右衛門の「会第六号」をもって事態の收拾が図られ、事件に動搖することなく

店員各自受持ちの持ち分を全うするよう訓示されている。同時に、日比翁助が副支配人に就任しているが、後述するようにのちに株式会社三越呉服店専務取締役及び取締役会長を歴任している。

高橋義雄の改革によって店員間に新旧の対立をひき起し、ストライキ騒ぎにまで発展することになったが、『箒のあと』にはこの辺の事情が次のように記されている。

古参の店員達が「多数相率ゐて同盟罷業を決定」するに至ったため、高橋は「断然其連累者を免職し」、代りに学卒者を雇入れている。しかしながら、「物指しの持方さへも知らぬ新参物が、複雑なる客の注文に応待する困難さは、殆ど言語道断であつた」。結局、高等商業学校出身者で、帳簿記帳方法の改正などを卒先して実行させていた瀧沢吉三郎を「三井銀行に転勤せしめ、其（その）代りに日比翁助氏を連れ来りて、局面を展開し、ストライキ番頭共の復職を許して、所謂妥協解決を告ぐるに至つた」。こうした「微温的方法」をもって店員間の混乱を防がざるを得なかったが、後年の「百貨店の基礎を築く事を得たのは、不幸中の幸とも謂ふべきであろう」と、高橋は記している。

ところで、この時期に三井呉服店に入店した日比翁助は、慶応義塾を卒業して明治二十七年に三井銀行に入行しており、和歌山支店支配人を経験している。明治三十一年九月九日に三井呉服店を命じられているが、その翌年には支配人に就任した。

のちに明治三十七年十一月二十五日、三井管理部において「三井呉服店ヲ独立セシメ株式会社トスル件」が可決され、三井家の「直接ノ営業ヨリ独立セシメ」、資本金五十万円の株式会社三越呉服店と改稱されることになった。

全株式一万株のうち五千株は、高橋義雄、日比翁助、藤村喜七及び益田英作の四名が等分に所有し、残りの五千株は三井関係者に割当てられている。そして、常務取締役の日比翁助、取締役には前記の高橋義雄、藤村喜七及び益田

英作に加えて朝吹英二が選出されている。こうして、明治三十七年十二月六日に株式会社三越呉服店が設立され、同月二十一日から新社名によって営業を開始している（『三井文庫論叢』第九号「管理部會議録」）。「デパートメント宣言」とともに新たに発足した三越呉服店を百貨店の先駆的存在として育成していった日比翁助は、日本経営史において近代的商業革命のパイオニアと評価されている。一方、旧態依然たる三井呉服店を改革して欧米風の新しい百貨店経営を目指した高橋義雄であるが、その功績は日比翁助ほどには広く知られていない。

しかしながら、斉藤隆三編『三越治革史』（大正五年刊）には、高橋義雄が実施した緒改革のうち販売政策では、陳列販売方式の採用、呉服專業への復帰、そして、婦人晴着の模様に新風をもたらし、時勢に適応した流行を創出したことなどを評価している。「元禄模様」の流行など宣伝広告の分野においても、高橋義雄は様々な新機軸を打ち出しているが、これについて次章において詳しく触れることにする。

一方、管理部門及び人事部門の改革としては、洋式帳簿の採用、学卒者の採用のほかに次の諸点があげられている。先ず、「子供」と呼ばれていた少年店員や手代などの住み込制度を廃して朝晩通勤させるようにするとともに、年季奉公制度を廃止して給料制を採用したこと。店内各種規制を制定し、その厳格な遵守を求めたこと。更に、仲買人を經由していた商品仕入れを、すべて生産者からの直接買付けに切換えたことなどを、理事高橋義雄の功績として『三越改革史』は指摘している。

この『三越治革史』は、几帳面な文字で記された手稿本であるが、三越資料室に所蔵されている。⁽⁴⁾三井家の発祥として越後屋の開業に始まって、三越呉服店東館が落成した大正三年に至る迄の沿革が、全二十八冊にわたって丹念に記されている。そのなかで、第十一冊第四編の「第五章 合名会社三井呉服店の成立 高橋義雄の理事就任とその施

策」では、四十頁にわたってその業績が記されている。明治二十九年七月、高橋は東北、北越の機業地を巡回しているが、時事新報に寄稿した「東北機（はた）場巡りの記」が転載されている。

三井銀行大阪支店長時代の高橋が、我が国最初の女子行員の採用に踏み切ったことは既に触れた通りである。三井呉服店においても、明治三十三年に仕立物検査係あるいは電話係として初めて女子店員が採用されている。翌三十四年には女子職業学校卒業生など数名を販売係に採用しており、三十六年には採用公募の応募者四百四十九名のなかから二十六名が採用されている（『株式会社三越 八十五年の記録』）。三井呉服店における女子店員の採用と言う当時としては全く画期的な人事も、理事高橋義雄の意向によるものであろう。⁽⁵⁾

明治二十九年末には、本店西側に新館を建築し、二階の大広間を陳列場に行している。ここでは、欧米の百貨店にならって、ガラスのショーケースに商品を陳列し、顧客が自由に選べるようにしている。当時としては、漸新な販売方法の採用である。

新たに「増築した、木造二階建陳列館は、明治三十年頃に於て、東京市中に比ぶ者なき壯観を呈し」ていた。当時の「小売販売業は遅々として未だ旧態を改めざれば、今度三井呉服店に於て、西洋デパートメント・ストアの販売を試むる積りであ」ったと述懐している。そして、旧師の福沢諭吉に「御来観を乞ひたき旨申（し）出」た。こうして、三井呉服店を訪れた諭吉は、「新旧売店、意匠部、又は仕入部等店内限なく巡覧」した。

そして、福沢諭吉の感想として「学者が飛込んで、二百年來、其事務に慣れた番頭の仕事を引受けて、さっさつと之を改革して行くと云ふのは、何と愉快な事ではないか、と非常に悦ばれた」と、『箒のあと』に紹介されている。ここで福沢が言っている「学者」とは、欧米の新知識を吸収した高橋義雄を指していることは言うまでもない。

七、三井呉服店における宣伝活動

三井呉服店の改革に着手し、欧米風への近代的百貨店を目指していた高橋義雄は、宣伝活動の分野でも新機軸を打ち出している。

「今度は営業宣伝に志し、明治三十一年末『花衣』と題する冊子を発行する事と爲った。最初に発行する冊子なれば、其内容を豊富にせんが爲め、私自身も『模様の説』と云ふ一篇を物し、大概如電翁作『江戸の風俗衣服のうつりかはり』と云へる百二十ページに亘る長篇を載せ、尚又尾崎紅葉に依頼して『むそう裏』と云へる短篇小説を執筆して貰った」。

『帯のあと』には、右の引用に続いて尾崎紅葉の江戸趣味が紹介されている。更に、「此頃紅葉は、例の金色夜叉執筆に没頭して居られたらしく、如何様眼の縁が黒ずんで、病が膏盲に入った容態を示して居た」と高橋は記しているが、それから五年後の明治三十六年に紅葉は歿している。

顧客を対象に我が国最初の企業広報誌として「花衣」（「花ころも 一名三井呉服店案内」とも表記されている）が発行されたのは、明治三十二年一月十日である。同年六月には「夏衣」が発行されているが、翌三十三年一月には「春模様」、六月には「氷面鏡」（ひもかがみ）、三十六年十一月には「みやこぶり」が発行されている。そして、それまでの変則的な季刊発行に代って、明治三十六年から同四十一年にかけて「時好」が毎月発行されているが、後藤宙外、小栗風葉、広津柳浪など当時の流行作家の短編小説が掲載されている。⁽⁶⁾「花衣」から「時好」に至る各号は、いずれも貴重な資料として三越資料室に保管されているが、この宣伝誌発行初期の段階においては高橋義雄が大いに力を入れてい

たと想像される。

更に、三井呉服店時代の高橋義雄の業績として、元禄柄の流行に触れる必要がある。『箒のあと』の「元禄模様の流行」の項には、高橋義雄自身が企画したイベントとして、次のように記されている。

日露戦争後の日本は、「世界屈指の大国と爲り、頻に好景氣を呼ぶ時節とて、世人の好みが派手に爲り、自然に大模様が歓迎せられて、元禄時代を再現せん事、最早（や）疑を容れぬ」と思われた。そして、「此辺で元禄時代が再現するのが相當だらうと思はれたので、（中略）、最優等の模様を選抜して、先ず十数種の衣裳を作り、次いで元禄花見踊と云へる一曲を作り新橋の流行芸者中より、踊手と地方（じかた）を選び出して、一組の舞踊団を組み立てた」。

更に、高橋自身の作詞による「新曲元禄舞に、杵屋勘五郎が節付（け）、藤間勘右衛門が振付（け）して、（中略）浮世絵其儘の姿を、交際場裡に現はしたので、雑誌も新聞も筆を揃へて之を報じ」た。こうして、「歌舞伎座の三月狂言大切所作事には、元禄踊が演ぜられ、流行は程なく大阪南新地にも伝染し」た。

日露戦争後の高揚した国民気分の中で華麗さが好まれ、「元禄模様は独り衣服髪飾の上のみに限らず、延いて調度器具、日常百般の品類までに及び、流行に乗じて元禄の名を冠する者は、元禄櫛、元禄下駄、元禄足袋、元禄煙管、元禄団扇、元禄手拭、元禄ネクタイ、元禄友禪等々、其数幾何（いくばく）なるを知らず、（中略）此頃の元禄流行は実に凄まじい勢であった」。

高橋義雄が仕掛けた元禄模様の流行が、「（明治）四十年頃まで継続したのは、明治風俗史中に、特筆大書すべき事項だろうと思ふ」と、『箒のあと』で述懐している。

前述の三越呉服店の宣伝誌「時好」明治四十年三月号には、次の記述がある。

「一昨年近来に於ける流行界の大現象に現はれた、恐（ら）くは今後とてもか程の事は再び見られないであろう。それは元祿模様の流行した事で、元祿ならでは夜の明けぬ様になった事です。（中略）三十八年春新橋名妓の一団体が元祿再興の主意を以て元祿踊りを始め、（中略）其派手なる其艶麗なる（は）、今までの世界が丸で一変した様にはれるので、これが非常なる喝采を博した。（中略）横浜には桃山踊に現はれ、京都、大阪にも元祿踊などが起り、一世を挙げて元祿を謳歌し、詩人は元祿を歌に、学者は元祿研究し、新聞は元祿風俗を論じ、元祿趣味は社会の百方面に蔓延した。元祿趣味は只に衣裳図案にのみ止らずして元祿下駄あり、元祿櫛あり、元祿料理ありといふ様な大流行を来した。これは読者諸君の記憶に新なる事であらうと思ひますが、（中略）元祿踊の衣裳は我（が）三越呉服店の調整する所であって、元祿趣味の中心点は我（が）三越呉服店であった事を述ぶるは、吾人が大に愉快に思ふ処である」。

更に、西沢爽『日本近代歌謡史 下』（桜楓社 平成二年）には、元祿踊りの作詞者として高橋義雄を紹介した個所がある。そして、前述の元祿ブームに便乗して「大流行元祿ぶし」（あるいは「元祿ぶし」）、「元祿掛合ラッパ」など亜流の俗謡が流行したことに触れ、いずれも日露戦争後の世相を反映した歌詞であることを紹介している。

三家英治編『年表で見る日本経済 広告』（見洋書房 一九九五年）及び、前掲の『株式会社三越 八十五年の歩み』を参考に、三井呉服店（のちに三越呉服店）在任時代（明治二十八年—三十八年）の高橋義雄が関係したと思われる宣伝活動を暦年別にまとめると、次のようになる。

明治二十八年

意匠部を新設し、著名画家を囑託に採用。新橋、柳橋などの一流芸妓に新案模様を着せ、中・上流婦人界へ宣伝。

明治三十二年

季刊宣伝誌「花衣」及び「夏衣」を発行。等身大の肉筆絵看板を新橋、上野、梅田の各停車場待合室に掲げる。

明治三十三年

季刊宣伝誌「春模様」及び「夏模様」を発行。

明治三十四年

季刊宣伝誌「氷面鏡」（ひもかがみ）を発刊。第一回「新柄陳列会」開催。

明治三十六年

月刊宣伝誌「時好」第一号発行。更に、季刊宣伝誌「みやこぶり」を発行（季刊宣伝誌の発行は、これをもって終刊となる）。我が国最初の貨物自動車であるクレメント号による配達を開始。

明治三十八年

旅順開城を祝し、「裝飾自動車」を走行（花自動車の最初）。日露戦争戦勝記念の手拭や風呂敷を発売。宣伝用極彩絵ビラを全国主要駅に貼付。元祿凶案を懸賞募集（元祿模様大流行の契機となる）。「時事新報」など全国主要新聞紙に新店名披露及びデパートメントストア宣言を掲載。

明治三十七年に株式会社三越百貨店に改組されたが、翌三十八年は同社の宣伝活動においても画期的な年であった。先ず、広告文作成の名手として知られていた浜田四郎が、当時の有力出版社である博文館から引抜かれている。のちに三越の取締役及び常務取締役を歴任する浜田であるが、明治三十九年十二月の東京日日新聞に掲載された「三越呉服店明日の広告場所」という空白の予告広告の奇抜さで知られることになった。のちに三越百貨店となる同社の広告

の漸新さは、常に業界をリードしていたが、その萌芽はこの時に発している。

明治三十八年には三越社内に行研究會が結成されているが、前述のように呉服、ネクタイ、手拭、櫛、下駄、煙管など多岐にわたる商品に元祿ブランドをつけて売り出されている。また、元祿美人を表紙に描いた英文ガイドブックが作成され、外人客に贈呈されるようになったのもこの年である。

ところで、岡田三郎助の筆による「むらさきしらべ」と題する美人画は、現在ブリジストン美術館に所蔵されているが、明治四十二年五月に三越呉服店のポスターに使用されている。高橋義雄が残した膨大な日記『萬象録』の大正九年二月二十六日の項には、次のようにこの絵の由来が記されている。

「美術学校教授、油絵師岡田三郎助来訪、明治四十年頃氏が余の求めに応じて先妻千代子の肖像を画きたるを、今度明治時代肖像展會に出品せんとするに就き借用したき旨依頼あり。此油絵は嘗て上野の油絵展覧會に出品したる事あり、又三越呉服店の絵看板に借用せられし事などあり。岡田氏は極めて温和なる人物にて其画風は親切なれども活氣に乏しき憾あり。此肖像画も亦其一なれども屢々世評に上りたる者なるに就き、今度又肖像展覧會に掲出せらるる都合と爲りたるものと見えたり」。

ともあれ、三井呉服店時代の高橋は、「職務柄従来の書生々活を脱却して、一簾（ひとかど）の紳士に成り澄まし、書画、骨董、茶事、音楽、演劇、相撲、扱は花柳界の果（はて）までも手を伸して、其研究やら道楽やらに、是れ日も足らざる有様であった」（『箒のあと』）。のちに、大正期・昭和初期を通じて第一流の茶人そして趣味人として知られた箒庵高橋義雄の素地が育くまれたのは、三井呉服店時代である。事業家高橋義雄が最も生き生きと活躍していたのは、この時期であったと思われるが、これについては改めて触れることにしたい。

八、三井鉱山への転出

明治三十一年、高橋義雄は三井呉服店理事を兼務のまま三井鉱山理事に任命されているが、ここで三井鉱山をめぐる当時の状況を概観したい。

明治二十一年、三井物産会社は入札によって三池炭鉱を払下げられている。その後、この炭鉱から産出される石炭の取扱いによって三井物産の売上高は拡大しており、更に石炭輸出によって同社の貿易量も増加していった。

明治二十六年には、三井鉱山合名会社が設立されている。その翌年、三井地所部とともに工業部に編入されており、朝吹英二が理事に就任してこれを監督した。この工業部には芝浦製作所、新町紡績所及び前橋紡績所並びに、富岡製糸所など四つの製糸所が所属していた。

明治三十一年十一月には三井系各合名会社契約が改定され、地所部は三井銀行に引継がれた。一方、芝浦製作所は三井鉱山に、新町紡績所及び富岡製糸所など七工場は三井呉服店に吸収されることになった。

そして、明治三十三年四月には「二六新報事件」が発生しているが、同紙の攻撃記事は中上川彦次郎に集中していた。こうした状況のなかで、かねてから懸案となっていた「三井家憲」の制定が急がれることになった。

明治二十四年に三井銀行に迎えられた高橋義雄が、井上馨から家憲制定のための調査を依頼されたことは既にふれた通りである。明治三十三年には、前述の事情のなかで東京帝国大学法科大学教授穂積陳重男爵に委嘱して家憲が起稿され、同年七月に制定されることになった。この間、高橋義雄は家憲制定に関与しており、『箒のあと』には「三井家の家憲」、「穂積男（爵）の苦心」、「大家の主人公」など三井家憲に関連した記述がある。

ところで、三井家憲の第一条には、三井同族家メンバーが規定されている。先ず、三井八郎右衛門を総領家とし、これに元之助、源右衛門、高保、八郎次郎及び三郎助を加えた六家をもって三井「同族ノ本家」としている。更に、復太郎、守之助、武之助、養之助、得右衛門の五家によって、三井家の「同族ノ連家」が構成されている。そして、右の十一家の当主及び「各家ノ家督相続人」が、三井家「同族」の構成員である。

また、三井家憲の第五十九条には「重役会ハ各營業店ノ重役ヲ以テ組織ス」と規定されているが、營業店とは三井銀行、三井物産会社、三井鉱山会社及び三井呉服店の四社である。そして、明治三十四年二月における三井營業店重役会の「本会員」は次の通りである。

| | |
|--------|---------------|
| 三井三郎助 | 三井鉱山合名会社社長 |
| 三井高保 | 合名会社三井銀行社長 |
| 三井元之助 | 三井物産合名会社社長 |
| 三井源右衛門 | 合名会社三井呉服店社長 |
| 益田孝 | 三井物産合名会社専務理事 |
| 中上川彦次郎 | 合名会社三井銀行専務理事 |
| 団琢磨 | 三井鉱山合名会社専務理事 |
| 朝吹英二 | 合名会社三井呉服店専務理事 |
| 上田安三郎 | 三井物産合名会社理事 |
| 高橋義雄 | 合名会社三井呉服店理事 |

波多野承五郎 合名会社三井銀行理事

なお、首席重役（社長）就任者以外の三井同族は、「参列員」として右の重役会への出席及び発言は認められたが、議決権は与えられていなかった。

明治三十五年（一九〇二）四月、三井家同族会事務局に管理部が新設された。明治三十八年一月の大幅な改組のち、同四十二年（一九〇九）十月末の三井合名会社設立に至るまでこの管理部は存続したが、「財閥形成途上の三井の中枢的統轄機関として重要な役割を担った」と評価されている（『三井事業史 本編第二編』）。

「三井部内人名簿」によれば、明治三十六年二月現在における三井管理部の構成メンバーは次の通りである。

会長 三井三郎助

専務理事 益田孝

理事 朝吹英二

会員 三井八郎次郎、三井高保など三井家各当主十名

重役会

会長 三井八郎次郎

会員 三井三郎助、三井高保、三井得右衛門、益田孝、団琢磨、早川千吉郎、高橋義雄、飯田義一など十一名

なお、三井営業店重役会及び三井管理部などに関する資料は、財団法人三井文庫編『三井事業史 資料篇三』（一九七四年）及び『三井事業史 本編第二巻』（一九八〇年）を参考にした。

三井呉服店理事時代の高橋義雄は三井系企業の役員として、三井財閥の経営中枢機関である重役会に出席していた。

そして、三井呉服店が三越呉服店に改組された明治三十七年の翌年には、高橋は三越を辞任して三井鉱山会社理事が本務となっている。

前述のように明治二十一年（一八八八）に三池炭鉱が三井物産に払下げられているが、この炭鉱の取得はその後の三井財閥の発展にとって重要な役割を果たしている。これに先立って既に明治八年（一八七五）に、三井組は抵当流れとなった神岡鉱山を取得していた。明治十九年には三井組神岡鉱山詰所が設置されているが、実質的には三井銀行総長の監督下にあった。

明治二十五年（一八九二）六月、三池炭鉱、神岡鉱山並びに、三井物産会社経営の岩雄登硫黄鉱など計十五カ所の鉱山を統合して、三井鉱山合資会社の設立が認可された。社長三井三郎助、副社長益田孝、取締役は西邑庸四郎、中上川彦次郎ら三名である。翌二十六年には商法の一部施行に伴って三井銀行、三井物産及び三井鉱山の三社はいずれも合名会社に改組されているが、三井鉱山合名会社の資本金は二百万円である。

明治二十七年には三池炭鉱に初めて自家発電機が設置されており、翌二十八年には筑豊山野炭鉱の鉱区買収を買収するなど、三井鉱山の事業は拡大していった。そして、前述のように明治三十一年には、三井工業部に所属していた芝浦製作所が三井鉱山に吸収されている。こうした状況のなかでの三井鉱山への新たな転出について、高橋義雄は『箒のあと』に次のように記している。

「三井呉服店整理を終わった上は、当然三井銀行に復帰すべき筈なり、私としても亦（また）夫（それ）を希望して居たが、本来私の実業奉公に対する覚悟は、三井の如き大家の使用人と爲った以上は、唯主人の命ずる所に働き、其仕事が自身に適するや否やを問ふべき者でないと云うのである。即ち鉱山理事と爲れば、専心其業務に当って、我職分

を盡せば足れりとて、二つ返事で之に応じ」た。

そして、三井鉱山会社専務理事であり、同社の最高経営者であった団琢磨を「補佐し、是より明治四十二年まで、引続いて鉱山事務に当り、此間三池築港事業が進行中であつたから、屢々（しばしば）九州に出張することがあつた」と、『籌のあと』に記されている。更に、『籌のあと』には「九州の実業家達」の項があり、地元の炭鉱主である有力実業家達と、三井炭鉱理事時代の高橋との交流が記されている。

その当時の石炭はエネルギー源として主要な位置を占めており、各種非鉄金属は軍用物資としても重要な資源であつた。こうして、鉱山業は富国強兵を目指していた明治政府にとって重点的な国策産業となつていた。

この時、三井鉱山会社の事実上の社長職である専務理事に就任していた団琢磨は、高橋義雄より三歳年長である。のちに、シーメンス事件の責任をとつた形で六十七歳の益田孝が三井合名会社顧問を辞して相談役に退いたあと、五十八歳の団琢磨が三井合名理事に就き、やがて理事長となつた。こうして、団は三井財閥を統轄することになったが、昭和七年に右翼の兇弾によって七十五歳の命を終えている。

九、王子製紙への転出

明治四十二年（一九〇九）十月、三井系企業全体を統轄する三井合名会社が設立された。同時に、三井銀行と三井物産会社はそれぞれ株式会社に改組されている。また、三井銀行の倉庫部門を独立させて東神倉庫株式会社を設立する一方で、三井鉱山は三井合名会社の鉱山部に編入されることになった（なお、この鉱山部は、明治四十四年には三井合名

から独立して、改めて三井鉱山株式会社となっている)。

そしてこの年(明治四十二年)、「三井内部の組織改正があって、私(高橋義雄—引用者)に王子製紙会社社長就任を触り当らるるや、是亦(これまた)二つ返事で承諾したのは、前述の如き私の覚悟で、転務は唯主人の命ずるまま之に当って、我最善を盡くすのみ、(中略)と云ふ主張を実行した迄であった」と、『筈のあと』に記される。

更に、高橋義雄は次のように続けている。

「王子製紙は政府事業として成立した」が、明治二十六年に澁沢栄一が同社取締役会長に就任している。日清戦争後における同社の事業拡大とともに、「三井の所有株が多数を占め、融通資金も、亦(また)巨額に上ったので、中上川氏は之を三井の手に引取り、藤山雷太氏を以て、其経営の任に当らせた」。

以下の稿では、成田潔英『王子製紙社史 第二巻』(王子製紙社史編集会 昭和三十二年)の記述に従って、高橋義雄が専務取締役就任する時期までの同社をめぐる状況を辿ることにする。

王子製紙会社は、我国最初の製紙会社として明治六年(一八七三)に設立されているが、その当時は抄紙会社と称されていた。その後、製紙会社と名を改め、更に明治二十六年の商法施行とともに王子製紙株式会社を名乗っている。日清戦争後、我が国の洋紙需要は増大しており、王子製紙も資本金を五十萬圓から百十萬圓に増資して事業を拡大している。その頃、澁沢栄一が王子製紙会長に就任していたが、実際には彼の意向を受けた専務谷敬三や、同じく専務で技師長を兼ねる大川平三郎に経営がまかされていた。

一方、前記の増資に際して、従来から資本関係が緊密であった三井銀行に相談したところ、芝浦製作所にいた藤山雷太が三井を代表して王子製紙に送り込まれることになったが、明治二十九年(一八九六)六月のことである。

この機会に王子製紙を完全に三井の手中に収めようというのが中上川彦次郎の意向であったが、生え拔きの役員達と藤山雷太の対立が激しくなっていた。やがて、創業以来の功労者である谷敬三専務が会社を去り、明治三十一年八月には大川平三郎も取締役技師長に降格となった。これに対して、大川に同調する技師や職工達を中心にストライキが発生した。

同年九月には、状況を收拾するため三井銀行から藤原銀次郎が支配人として送り込まれた。一方、藤山雷太もまた明治三十五年四月に専務取締役を辞したため、三井工業部理事の朝吹英二が新たに専務取締役を兼任したのち会長職に就任した。更に、三井銀行神戸支店長であった鈴木梅四郎が専務取締役として送り込まれることになった。

その当時の王子製紙は、繰越損失金十八萬円、借入金総額百八十三萬円に達しており、信用状態が著しく悪化していたため、三井銀行も融資に応じない状態であった。三井銀行から送られて来た鈴木は、資本金二百萬円を五十萬円に減資したのち、改めて百五十萬円に増資して借入金返済に充当した。こうして強硬な財務再建計画を実施したものの、王子製紙は三井にとって大きな負担となっていた。

明治三十九年には苦小牧工場の新設が計画されているが、資金不足もあって建設は大幅に遅れていた。こうした状況のなかで、三井から新たに前山久吉が常務取締役として王子製紙に送り込まれた。一方、激務に疲れた鈴木梅四郎が明治四十一年十一月に辞任を申し出たため、その後任として専務取締役に任命されたのが、高橋義雄である。前出の『王子製紙社史 第二巻』は、高橋の王子製紙入社は「鈴木専務後継者の人選が決定するまでの、暫定専務としてであった」と断じている（同書二七〇頁）。

この『王子製紙社史』では、高橋義雄は経営者として余り高く評価されていないようである。専務取締役就任後に

同社工場を訪問した高橋について、「相変らず実業人というよりもむしろ文化人の性格を発揮して、次の二首を詠じて工場員に示した」と、社史は記している。次いで、皇太子殿下時代の大正天皇が、苦小牧工場に台臨された際に高橋が台覧に供した自作の和歌も紹介されているが、経営者としての高橋については次のような記述がある。

懸案の王子製紙苦小牧工場は、明治四十三年九月に営業を開始している。そして同年末には、苦小牧工場に附帯する全工事が完了しており、同社の経営状態も改善されつつあった。一方、いずれも取締役として王子製紙にとどまっていた鈴木梅四郎及び前山久吉の両名と、新参の専務取締役である高橋義雄との対立がみられるようになった。

こうした対立のなかで、明治四十四年七月の決算取締役会では、高橋専務が提案する5%復配に対して、鈴木と前山の両取締役は10%配当を主張した。高橋の提案は、三井家最高顧問である井上馨侯爵の意志によるものである。更に、この5%配当に反対する鈴木と前山については、「断じて（取締役）再選はまかりならぬと井上侯からの厳命があった」と『王子製紙社史』に記されている（第二卷三一五頁）。

このため、同年（明治四十四年）七月二十八日開催の王子製紙株式会社第七十五期株主総会は紛糾したが、鈴木及び前山を含めた取締役全員の再選重任が決定された。

権力者である自己の指示が履行されなかったため、井上は「大変に立腹で、高橋が何と謝ってもいつかなその怒りは解けない」。そして、「まず第一に高橋から専務を辞するのが良い」というのが井上侯爵の意向であったと、『王子製紙社史 第二卷』は記している。

こうして、井上馨の意向に沿って、取締役会長朝吹英二、専務取締役高橋義雄、そして取締役鈴木梅四郎及び前山久吉のいずれもが辞任して、王子製紙を去ることになった。

一方、高橋自身は、『箒のあと』の「王子製紙の二年半」の項で、次のよう記している（上巻 五〇七頁）。

「三井家に奉公してより、早くも十八年を経過したが、本来私は、文芸社会に棲息すべき人間だと自覚して居るから、年齢五十に達すれば、実業社会より退身せんとするのが、最初身を此社会に投ずる時からの予定であった。然るに、王子製紙会社の北海道苫小牧工場は、前途約二箇年半にて、落成すべき計画なれば、之を私の最後の奉公として、右計画の完成次第、実業界より退身せんと思ひ付き、快く其任命を承諾したのである」。

一方、『王子製紙社史』では、苫小牧工場完成は鈴木及び前山の両取締役の功績としており、高橋義雄については極めて冷く評価している。右に引用した『箒のあと』の記述は、そのまま高橋の本心であったと受け止めて良いのだろうかと疑いたくなる。

ところで、『王子製紙社史 第三卷』（昭和三十三年刊）は、第二巻と同じく成田潔英の著述であるが、先に引用した第二巻の内容と若干異っている。

「専務取締役の高橋義雄は、苫小牧工場落成後における前山久吉との間に生じた容易ならぬ確執を慮り、事前に第七十五期総会の紛糾を見越して引責辞職を決意し、三井家最高顧問井上馨諒解の下に、三井物産社員の藤原銀次郎を後任専務候補者として、豫（あらかじめ）め王子製紙会社に任命する方法を採った」。

続いて同書には、「藤原銀次郎氏二当会社主事ヲ囑託致度候間御承諾被成下度」旨を記して、高橋が三井物産株式会社社長三井八郎次郎に宛てた明治四十四年九月十九日付の短い書簡が転記されている。

一方、『箒のあと』には、「私（高橋義雄―引用者）を始め従来 of 役員は、総辞職を爲し、藤原氏を新社長として、新内閣を組織せしむるに至った」と簡潔に記されているが、「総辞職」に居たる経緯については全く触れられていな

い。

また、高橋の「後任については、当時本社の事業に、多大の関心を有（も）たれた井上世外侯、又は三井幹部の意嚮も察して、藤原銀次郎を適任者と認めた」と記されている。一方の藤原は、「三井物産会社小樽支店長を勤め、北海道の木材海外輸出事業等に就き、多年経験を積まれ」ていたと、『帚のあと』は記している。藤原銀次郎は、先に王子製紙のストライキが收拾したのち三井物産に転じており、ふたたび王子に返り咲いたことになる。

ところで、『王子製紙社史 第三巻』には藤原銀次郎が同社の最高経営者職である専務取締役就任を決意した時期に、三井物産の同僚である小川多慶に宛てた明治四十四年九月三十日付書簡が転記されている。それによれば、「益田、井上両老より殆んど拜まぬ許りの御依頼男兒として之を断る訳に参らず」とあり、高橋義雄の名前は記されていない。

「三井の厄介者」と言われていた王子製紙を引受ける当って、藤原は井上馨の推薦を再三にわたって、固辞したものの、結局は「一身を犠牲とする」覚悟に到った経緯は、前出の書簡に記されている通りである。更に、下田將美『藤原銀次郎回顧八十年』（講談社 昭和二十五年）には次の記述がある。

「高橋氏はまことに円満な人なので鈴木氏に代って専務になったが、前山久吉氏を常務に据えて苦小牧の常勤重役とした。（中略）しかしかうした強烈な前山氏のやり方は方々に衝突を起して、遂に高橋氏とも三井とも相容れず王子から退陣してしまった」。

もともと実業界を辞して文筆の世界に入るのが予定の行動であったと、高橋義雄が記していることは前述の通りである。しかしながら、王子製紙専務取締役就任に至ったのは自からの意志によるものではなく、この点全く未練がな

かったのかどうか、高橋の本心を知るよしもない。もっとも、その後の彼の精力的な著述活動と生活態度は、彼の本領が発揮されたのはその後半生にあったことを如実に物語っている。

ともあれ、三井在勤中の高橋義雄は、三井家に対して忠勤に励んでいた。彼自身は、『箒のあと 上巻』の終りに近い個所で次のように記している。

三井家が「日本第一流の旧大家であったが爲め、同勤の多くは修養ある士人のみで、年月を比較的純潔の境涯に送る事を得たのは、何より有り難く、（中略）学問して福沢を師とし、奉公して三井を主としたのは、私の生涯に於ける、非常なる幸運であったと誇っている次第である」。

王子製紙を去るに当って、三井銀行総長三井高保男爵に挨拶に伺ったところ、色紙に書かれた惜別の和歌が渡された。これに対して高橋は、

久しくも汲みなれて知る彌増（いやす）にみつ井の水きめぐみをと返歌している。

十、実業界との訣別

『箒のあと』の記述によれば、「（明治）四十四年、同社（王子製紙―引用者）苦小牧工場完成の機会を以て、予期の通り引退の決心を爲し、同年初冬、藤原銀次郎に後任を譲って、愈（いよいよ）よ実業社会に告別したのである」。

右の文章では、誠に円満な引退のようであるが、前出の小川多慶宛の藤原銀次郎書簡には、「七月末同社（王子製

紙―引用者〕重役改選に際し重役間に大衝突之有其結果三井家と同社の争となり一大同盟罷工を起す段取となり一大紛糾を起し」とある。高橋義雄が王子製紙を去る背景には、三井事業史において一大汚点を残すことが深刻に懸念されていた経緯があった。

一方、高橋は、「私が王子製紙会社々長を辞すると同時に、三井の方までも退いた事を予定の行動であるとも知らず、深切に私を訪ねて、他の実業口を世話しやうと云ふ友人もあった」と記している。というのも、このまま実業界にとどまることは、「人物経済上、甚だ不得策な事だろうと思ふ」として、きっぱりと実業界に訣別したと『箒のあと』で述懐している。更に、高橋は次のように続けている。

「実業界で過したならば（中略）相当の報酬も得らるるであらう」。しかしながら、今では「最高学府より、年々有爲の人物が輩出して、常に就職難を稱へている時代に、実業家として、杼で量るやうな私が、何時まで後進を塞いで居たとて、其（その）得る所は多寡の知れた者である」。むしろ、「自身の稍（やや）得意と信ずる他方面に於て、ヨリ有効な仕事を見出し、之に後半生を託する方が、遙に得策ならんと思ひ定め、明治四十四年末、五十一歳を一期として、実業界に告別した次第である」と、『箒のあと 上巻』を結んでいる。

右の記述を読む限りでは、誠に潔い人生である。しかしながら、三井呉服店時代における守旧勢力との葛藤あるいは、王子製紙における役員間の対立などに思いをめぐらし、サラリーマン経営者の生活には未練はないというのが、高橋義雄の真意ではなかっただろうか。

いずれの産業部門も慌しく発展の道を急いでいた明治後半期であるが、二十一年間で銀行から呉服店を経て鉱山業、更には製紙業へと全くの異業種間の転進は如何にも目まぐるしい。今日の言葉で言えば企業グループ内の「出向」で

あるが、高橋自身は再三にわたる転出に不満はなかったのだろうか。内心の葛藤はさておいて、企業組織に身を置く者として、高橋義雄は「実業奉公」と達観していたようである。

『筭のあと 上巻』の記述によれば、「井上侯の紹介に依り、澁沢、益田両先輩の推挙を以て、最初に三井銀行に入」った。そして、「明治二十四年より、身を実業界に投じて、三井銀行に入り、同二十八年より、更に三井呉服店の改革に当り、三十二年、三井鉱山会社理事を兼任し、三十七年、三井呉服店が株式会社三越と爲るや、私は程なく三井鉱山会社理事と爲り、同四十二年、三井営業店組織変更後、三井を代表して王子製紙会社長を引受け」た。満二十一年にわたって三井に勤めたのだが、「本来を云へば、算盤を取るよりも、筆を取る方が得意であった」と言う高橋義雄の述懐は、本心であろう。

二十一年間にわたって実業界に身を置いていた高橋は、独立した企業家になることなく、当世風に言えばサラリーマン経営者に徹していた。オーナー経営者として心を砕くよりも、充分なゆとりをもって我が道を極めようと自らの処世哲学を固持していたのであろうか。実業界を去ったあとの残りの二十七年間が、箒庵高橋義雄にとって本当の人生であったかも知れない。繰り返して言うようだが、その後の彼が残した数多くの著作は、その第二の人生が稔り多かったことを物語っている。

ところで、王子製紙社長となった藤原銀次郎が、三井物産時代の同僚であり親友であった小川多慶に宛てた前出の書簡の追伸には、「高橋氏三井家参事に帰り」とある。王子製紙を去った高橋義雄は、当分の間、三井合名会社参事の職にあったと思われる。

十一、良き大正期ブルジョアジーの生活

『箒のあと 下巻』の冒頭には、「明治四十四年末を以て、二十一年間没頭して居た実業界を引退して、いよいよ閑散の身と爲った」と記されている。そして、「閑散の身となるや第一(一)茶会記録を作る事と、第二(二)感想日記を認むる事を思ひ立った」。その目的は、「文学、美術、工芸、茶事風流の諸道とも、今後一層複雑頻繁に成り行くであろう」。従って、「其実状を記録して置いたら、後世より今日を観察せんとする者の爲(め)、極めて有力な材料となるであろう」と記している。

こうして、「(明治四十四年)二月初旬より茶会記録に着手し、最初は東都茶会記と題し、其後大正茶会記と改めて、大正十五年末まで、引続き時事新報に掲載し、昭和二年以後は、昭和茶道記と改題して、之を国民新聞に掲載、同七年六月迄継続し、前後二十一年間、記録して置いたから、後人をして此間の消息を知るに多少の参考と爲るだろう」。

一方、

「感想日記は、明治四十五年五月中旬より執筆し始めたが、之に就き私の考は、凡そ時代の時相は、(中略)目撃者にして之を記述し置かざれば、天下後世何に拠つて之を追跡する事を得やう」。

こうして、

「萬象録と名附け、明治四十五年五月より、大正十年六月まで、足掛十年間継続した処が、其日記が彪然として殆んど等身に達したから斯くては折角骨を折っても何人も之を読む者がなからうと思ひ、本録は此時を以て絶筆し、其後は普通の日記を認むる事とした」。

とはいえ、後が丹念に記した『萬象録』を「他日何方かの図書館に寄托して、砂中より金を拾はんとする好事家の材料へ供へやうと思っている」と、その意図を記している。

右に記した事情によって高橋義雄が執筆を断念して六十五年が経過してから、『萬象録』全二十冊が思文閣出版から復刻出版されることになった。こうして、大濱徹也、熊倉功夫、筒井紘一の校訂を附した『萬象録 高橋箒庵日記 巻一―巻八』が一九八六年から一九九一年にかけて刊行されているが、大正元年から同九年に至る丹念な日記である。しかしながら、最終巻に当る「巻九」（大正十年分）の出版は大幅に遅れており、一九九七年春の刊行予定といわれている。

ともあれ、次章の「十二 閑雅なる経済生活」以降の稿においては、この『萬象録』の記述を再三にわたって引用させていただくことになる。

更に、『箒のあと 下巻』によれば、前出の「『東都茶会記』執筆をする傍ら、大正三年十月に慶文堂から『我楽多箒』と題する趣味的著作を発売した」。ここには、これまでに高橋義雄が身を投じた趣味の世界である「詩歌、書、画、茶湯、道具、建築、築庭、能楽、絃曲の十種」について敘述されている。その後も、『箒のあと』執筆中の「昭和七年に至るまで、実に十九箇年を閲し、私の趣味的経験は、寧ろ此半世の方が潤沢である」ため、新たに趣味の本を著したいとの希望を記している。そして、晩年期の箒庵は昭和十年に『趣味ぶくろ』を出版している。

大正四年四月には、『実業懺悔』を刊行しているが、『我楽多箒』とともに箒文社の出版であるが、この出版社については後述する。『実業懺悔』は、高橋義雄の二十年間にわたる実業家生活の所産であるが、益田孝が次のような序文を寄せている。

「明治の実業界に於ける高橋君の功名は、事珍しく吹聴する迄もなき事ながら、予が最も感服したるは、君が三井銀行より同呉服店に転じ、所謂越後屋伝来の商売に大革命を加へたるにあり」、そして「店舗全部を開放して陳列場となし」た。これは、「実に君が新工夫にして、破天荒と云はざる可からず、三越呉服店が氣運に乗じて、今日の『デパートメント・ストア』を成したる」のは、高橋の功績であると讃えている。

ところで、実業界を訣別したあと二十五年間に及ぶ高橋義雄の生活は、一言で云えばどのような生涯であったか、適切な表現を見出すのにとまどうことになる。

まず、「引退生活」と云う表現は全く当らない。また、「閑雅な生活」と云うには、多彩な趣味の世界を中心に多忙な生活を送っていたことは、『萬象録』にも克明に記されている。

淡交社から復刻出版された『東都茶会記 五』（平成元年）所収の熊倉功夫氏の詳細な解説には、高橋義雄が実業界を訣別した以降の時期を「数寄者の時代」のタイトルとともに説明されている。しかしながら、次章で詳しく触れるように、その後の高橋は単に「数寄者」であるだけでなく、精力的な執筆、華麗とも言える交友、多彩な趣味、更には経済活動を加えてエネルギッシュな生活を送っている。

前出の熊倉氏の解説は、「心ならずも二十一年間、実業社会に寄り道して、五十一歳にしてついに念願の数寄者となった簞庵は、茶の湯を中心とする趣味三昧の生活を送ることになった。昭和十二年（一九三七）に七十七歳で没するまでの二十七年間は、生涯のなかで最も充実した時代であつたろう」と記している。

確かに、高橋は「生涯のなかで最も充実した時代」を迎えることになるが、それを可能にしたのは「二十一年」にわたる「実業社会」の生活である。この間に確立された社会的地位、交友関係、経済的豊かさなどが高橋の「数寄者

の時代」を可能にした。高橋が経験した経済人の生活は、決して「寄り道」ではなく、精神的にも豊かな後半生を約束したのである。

実業界に訣別した高橋義雄のその後の生活は、いわば大正期ブルジョアジーの一つの典型を如実に示していると言えるだろう。なお、実業界に一応の句切りをつけたあとの高橋義雄の生涯を以下の稿で記述するに当たっては、彼の号「箒庵」を併用することにした。

十二、閑雅なる経済生活

三井系各企業の役員を歴任した高橋義雄が実業界に訣別して新たな生活に入った時、既に充分な恒産を築いていた。従って、その後の閑雅な生涯を送るのに全くの不安はなかっただろう。

明治二十八年七月、三井呉服店理事に就任した時の高橋義雄の給料は貳百円であった。一方、三井物産合名会社理事三井養之助及び三井工業部理事朝吹英二の給料は、いずれも貳百五十拾円である。また、三井呉服店部長三井源右衛門及び三井工業部々長三井武之助はともに貳百五十拾円、三井鉱山合名会社理事三井得右衛門の給料が百五十拾円であり、三井家同族の役員に比べて高橋の給料は充分に高給である（以上は、『三井事業史 資料篇三』所収の「三井家同族会議事録 明治二十八年七月二十二日付議事摘要」による）。

一方、『三井文庫論叢 第九号 一九七五年十一月』所収の「三井家同族会管理部会議録（その三）」には、三井系企業「各重役の重役賞与金（明治三十五年度）」が記されている。益田孝の月額報酬六百円を除いて、団琢磨、早川

千吉郎、朝吹英二、高橋義雄ら七名の役員の給料はいずれも五百円である。

更に、同年度における各役員の上期及び下期を合算した年間合計賞与額は、益田孝の九二、四八三円を筆頭に、団琢磨、早川千吉郎、渡辺専次郎の三名がいずれも三九、六三五円である。そして、朝吹英二の二六、四二三円に続いて、高橋義雄、波多野承五郎、飯田義一の三名はともに一九、八一七円である。一方、三井八郎右衛門、三井八郎次郎、三井三郎助、三井高保の年俸はいずれも一二、〇〇〇円であることから、三井家同族の人々に比べても、前記の八名の役員は高額の報酬を得ていたことになる。

ちなみに、明治三十年当時の小学校教員の初任給は月額八円、同じく巡査の初任給九円である（『値段史年表 明治・大正・昭和』朝日新聞社 昭和六十三年）。

こうして、永年にわたって多額の収入が保証されていれば、金銭に執着しなくても十分な蓄財があっても当然である。更に、三井系企業の元役員として、高橋義雄が十分な社会的評価を得ていたことは言うまでもない。従って、ひとまず実業界を引退したとはいえ、様々な経済活動に関係して高橋義雄の協力を求められる状況があった。

例えば、『萬象録 高橋箒庵日記卷一』（思文閣出版 一九八六年。以下の稿では『萬象録』と略記し、巻名のみを附す）に所収の大正元年七月十日の日記に次のような記述がある。

「水戸百四銀行頭取吉見輝来宅。同銀行を同市常磐銀行を合併して資金百萬圓の銀行と爲すに就き、過日余が提案せし通り川崎銀行と交渉方依頼の爲めなり」。

更に、同年十一月二十四日には、

「川崎銀行に赴き頭取八右衛門氏に面会、豫て水戸の百四銀行と川崎の水戸（支店―引用者）にて世話し居る商栄銀行

と合併に就き」

再度幹施している。

そして、『萬象録 卷二』所收の大正三年十二月十五日の項には次の記述がある。

「水戸百四銀行と常磐（銀行）引用者」と合併仲介人たりし謝礼として、百四銀行頭取秋山誠明より北川北仙造黄銅製花瓶神代田楽獅子舞之図を贈るべしとて先ず目録を送り来れり。北仙は水戸の金屬彫刻師にして七十許りの老人なるが、水戸唯一の彫金者（後略）」。

なお、前記両行合併に至る経緯については、同年六月六日及び十三日、更に七月三日、十六日及び二十三日のいずれにも関係の記述がある。水戸は高橋義雄の出身地であるが、加えて三井系元役員と言う経歴が評価されて、合併幹施を依頼されたのであろう。

また、大正元年八月二十日の日記には、「室田義文氏を鐘ヶ淵紡績会社に推薦の件、手紙にて朝吹英二氏に申入れ同時に室田氏に其旨を通知せり」とあるように、三井系企業への知人の幹施に労をいとわなかったようである。⁽⁷⁾

更にまた、『萬象録』には株式投資に関する記述が散見されるが、優良企業のみならず新興企業への投資にも参加している。

例えば、大正元年十一月二十三日の日記には、

「河崎鋳来宅、余は氏の大崎に設立せんとするティープ製造工場に二千圓出資を承諾し、其契約書に調印せり」とあり、同月二十九日の項に、

「河崎鋳のティープ工場第一回払込を爲せり（千圓）」

と記されている。なお、別の項には「電気テープ製造工場」の記述が見られるが、絶縁テープの製造工場であろうか。また、順序は前後するが、同年十月二十五の日記には、

「岩下清周氏の勧誘に係る日本興業会社株八百株の払込を北濱銀行に持参せり、但し実際の申込は二百株（中略）、六百株は追て岩下氏が払込みの時に処分して結局当方の持株は二百株にすべしとの口約なり」

とあるが、岩下清周は三井銀行時代の高橋義雄の先任者であり、のちに北濱銀行を創設している。

更に、同年十二月一日の日記には、

「木本鉄工株百株五千圓を三井銀行に払込む」

とある。前出の「電気テープ製造工場」及び日本興業会社とともに、いずれも新規発行株あるいは増資株の払込みと思われる。

更に、当時の有力実業家との交友に関係した新規事業への投資にも、高橋義雄はつきあっている。大正五年七月二十五日の項には次のように記されている。

「安川敬一郎、平賀義美等の計画に係る大阪織物会社は、従来百四十萬圓の資本なりしを今度三百萬圓に増加するに就き余の所有株二百株に対して二百二十八株増株の旨通知し来る。乃（すなわ）ち全部応募に決せり」。

また、同年十月二十二日の日記には、

「益田孝氏を訪ふ。同氏は今回小田原に於て水力電気を利用し、二百萬圓の資本を以て金巾紡織会社を設立する計画中の由（中略）。右発起者中に余の名をも加へたしとの事に就き異依存なき旨答へ置けり」

とあり、続いて同年十二月十五日には

「小田原紡織会社五百株引受け申込を爲し、証拠金一株に就き二圓五十錢を払込む」と記されている。

この年（大正五年）七月一日の日記にも

「日本紙器製造会社百株、一株に就き七圓五十錢払込む」とあり、増資新株の引受けと思われるが、その一方で、当時の優良株にも高橋義雄は活発に投資していた。

例えば、大正五年一月三十一日の日記には次のように記されている。

「三越呉服店新株四百株一株に就き十二圓五十錢を払込む」。

その一方で、第一次大戦下の好況期にあったこの年（大正五年）の日記には、持株の売却に関する記述が散見されるが、その年十一月には株式は暴落している。

続いて、翌大正六年の日記から株式の買付けに関する記述を拾ってみると次の通りである。

一月二十五日

三井銀行に赴き（中略）郵船会社株三百、鐘淵紡績株三百、北海道炭鉱会社株五百買入（れ）を依頼せり。

一月三十日

三井銀行営業部にて上記株式を引取り、三越呉服店株八百株と併せて之を担保に供し、新規買入株式代十七萬圓を約束手形にて借入る。

更に、大正九年一月二十一日の日記には、「三井銀行に赴き（中略）、三越呉服店新株二五〇〇株の払込を爲し、三井合名会社より功勞株として贈られたる三井銀行株百株の名義書換を依頼せり」

とあるが、高橋義雄がそれまでに関係していた三井系各企業の株式保有に関する記述が散見される。例えば、同じ大正九年三月一日の日記。

「所有王子製紙会社新株五百四十株に対して一株十円の払込を爲す。同時所有千代田火災保険会社百株に対する増資株五十株の申込を爲す」。

そして、同年七月一日には次の記述がある。「王子製紙会社新株五百四十株一株二十圓の払込を爲す」⁽⁸⁾。

ところで、高橋義雄が役員を歴任した三井系各企業のなかでは、のちに株式会社三越と名を変える三井呉服店に最も愛着を抱いていたのではないかと思われる。例えば、大正三年（一九一四）九月から十二月にかけて三越に関する記述が目立っているが以下に引用する。

九月二十八日

〔東京市に高層の建築〕

午前十一時三越呉服店の新館開店式に参列す。五層の建築上に屋上庭園あり、小売店としては無論東洋一なるべし（後略）。

十月十七日

〔三越呉服店自宅招待〕

本日は三越呉服店重役中藤村喜七、中村利喜太郎、酒井良明、益田英作、山岡才次其他店員合せて十二名を招ぎ晩餐を饗する（中略）。

三越呉服店は明治二十八年余が理事となりてよりデパートメント・ストアの計画を立てて着々進行せしに、旧店員

と新店員との間に新旧思想の衝突ありて一時ストライキが起り改革上百般の困難せしが（中略）、三十七、八年頃之を株式会社となして三井呉服店を三越呉服店と改め、遂に今日の盛況を呈し新建築も落成したるに就き、此際慰労旁（かたがた）右重役及び重立ちたる店員を招待せしなり（中略）。

此店員中には余が呉服店改革の際新旧思想にて一時敵味方の如き観をなしたるものありたれども、時勢の進歩と共に改革の趣意も徹底して今日にては共に懐旧談に耽り一同無限の感興を催したるものの如し、十年間苦勞を共にせし店員の会合とて恰（あたか）も一家団楽の如く近来快心の晩餐会なりき。

十一月二十五日

〔広告意匠展覧会〕

三越呉服店に赴き（中略）、笠原健一の案内にて店内に開催の広告意匠展覧会を一覧す、内外各種の広告ビラ、看板等順序的に陳列せしものなり。中に余が明治二十九年頃島崎柳塢をして日本服の二美人を描かしめ、之を新橋停車場に掲載したる旧額面を見受けぬ。日本の呉服店が停車場に絵看板を上げたるは之れが最初にして今は唯一の記念となれり。

十二月十五日

実業の世界に、「三越は如何にして今日の大を致せしや」と題する一篇の記事あり、余が明治二十八年同店の理事として小売販売法に大改革を施せし事蹟に就き記事する所あり、何人の立案にや大体當時の実況を明（きら）かにするに足る。

右の記述に見られようにいささかの自負をもって回顧していた三越呉服店に、高橋義雄がふたたび取締役として迎えられるのは、それから二十年間が経過した昭和十年のことである。その当時の高橋は既に七十五歳の高齢に達していたが、これについては改めて触れることにする。

一方、現在ほど充分に普及していなかった火災保険あるいは生命保険であるが、高橋義雄の富と社会的地位は、当然ながら勧誘の対象となっていた。大正元年八月十六日の日記には次の記述がある。

「共同保険会社員を招き、従来一番町住宅に附け置きたる火災保険四萬圓を四谷新宅の方に移して継続する事と爲せり」。

また、同年十一月三十日の日記には

「千代田生命保険会社より門野氏の紹介を以（つ）て役員来宅、同社事業拡張に就き余にて積立保険に入るべしとの勧告あり（中略）己むを得ず五千圓約束せり」。

とある。そして、大正八年九月二十日の項には次の記事がある。

「千代田生命保険会社参事大原某来宅、明治三十七年同保険会社創立の際余は其株主と爲り、又二千圓十五年目受取保険契約の処右満期と爲りたるを以て、五百余圓の配当金附に本日引渡さる」。

更に、「同人の勧誘已み難く更に一萬圓十二年の受取の契約を爲せり」と追記されている。

そしてまた、東京市の郊外が新興住宅地として西に向かって開発されていた当時において、土地分譲の話が高橋義雄に持ち込まれている。大正元年五月九日の日記は、「駒沢村の田園都市」の欄外の見出しとともに次のように記されている。

「東京信託会社に於て今度豊多摩郡駒沢村字新町に七萬坪の地面を買収して（中略）二、三百坪より千坪までの区划副を立て」売出したため、「余も亦其中二千百坪の一区副を坪六圓にて買入れぬ」。

一方、大正七年七月十七日の日記には、

「大正三年、玉川電気鉄道沿線駒沢村に於て、東京信託会社が経営したる七萬坪の田園都市内に約二千坪の地面を買取り置きしが、買入値段坪六圓五十銭なりしに今度坪八圓五十銭にて買手ありとの事に就き、自身使用の目途もなければ其希望に応じて譲渡し、昨日登記済みて代金を受領せり」。

右の記述によれば、実際に土地を購入したのは大正元年か、あるいは大正三年なのか明確ではない。いずれにせよ、三年間あるいは六年間で四千圓という当時としては多額の利得を手に入れたことになる。高橋箒庵の閑雅な生活は、こうしたいわば不労所得による蓄財の機会に恵まれていたことによるものであろう。

ところで、小林一三が三井銀行大阪支店長時代の高橋義雄を「銀行に出勤する平素の服装は和服で（中略）役者のやうな美男子であった」と、『逸翁自叙伝』で述懐していることは既に触れている。そして、実業家を離れたあとの箒庵高橋義雄は、和服で通っていたようである。大正六年五月十九日の日記には、次の記述がある。

「去る明治四十五年実業家退去以来一切洋服を造らず、洋服着用必要ある場所には絶対に参会を拒絶せしが、来る二十一日、天皇陛下華族会館に行幸せらるるに就き、余は能楽会理事として参会の必要あり。本日、三澤洋服店主を招きてフロックコートを注文せり」。

日常生活を和服で過すことは、当時にとってはそれほど珍しいことではなかっただろう。とはいえ、和服の着用は箒庵高橋義雄の閑雅な生活を具現しているようであるが、彼の生活態度は必ずしも保守的ではなかった。例えば、当

時としてまだ稀少であった自家用車を卒先して購入しているが、大正四年十二月三十一日の日記に次の記述がある。

「梁瀬商会に注文の自動車出来、本日回送し来り（中略）。自動車代三千六百圓を支払ふ」。

ところで、柳田諒三『日本自動車三十年史』（山水社 昭和十九年）によれば、明治四十五年における日本全国の家用自動車台数は、三五四台と推定されている。その後、大正期に入って自動車の輸入台数は漸増するが大正十一年における我が国全体の自動車保有台数は、一四、八八六台にすぎない。

大正九年（一九二〇）には、第一次大戦後の恐慌が我が国を襲っているが、高橋箒庵は同年十二月三十一日の日記に「大正九年歳暮の感」として次のように記している。

「当春以来財界不況の爲め友人中大成金と爲りたる者が俄に難局に陥り、一時大得意なりしだけ失意の度も亦最も甚だしき者あり。余等も亦所有物の価額暴落の爲め其影響も受けたれども、一時得意とならざりしだけ失意も亦少なく、平氣に越年する事を得るは先ず以て幸福の方なるべし」。

高橋箒庵の経済行為は、飽くまでも閑雅な生活を維持するだけで充分であり、自ずから限度を越えることはなかったであろう。

十三、伽藍洞一木庵

「明治三十一年に、麴町一番町五十五番地に新宅を営み、京都大徳寺塔頭寸松庵の茶室を移築した」と、『箒のあと上』に記されているが高橋義雄の最初の居宅である。

「宮城の森の一部を見渡す高台の、方形一千坪の地面に、我が住宅を構築したので」あるが、三、四年後には「西南方の一角に、三百余坪の空地があるのを利用して、新茶室を建設」した。「庭は、大体塩原箒川の景色を写し」、この新茶室は箒庵と名づけられたが、「是れがとうとう私の雅号となっ」た次第である。

大正三年（一九一四）三月には、四谷伝馬町に居宅を移し、茶室白紙庵を建てている。そして、大正六年十二月には赤坂区一ツ木町八十二番地に新宅を建て、茶室伽藍洞一木庵が完成することになる。

高橋箒庵日記『萬象録』大正六年四月二十五日の項に、「赤坂新宅買入動機」の記事がある。四谷伝馬町に居住していた箒庵が、療治を受けた赤坂在住の按摩の談話を次のように紹介している。

「一ツ木町の伊東子爵御隠居に参りて御座敷に通れば、私は盲目なれば何事も分らざれども、唯其風が世間の風と違ひて最と清ければ眺望も定めて宣いだろふと思ひますと言ふを聞き、一日同宅の近辺に到りて其地勢を見るに、果して前面に広濶なる森林を見渡す景勝あれば、豫（かね）て之を得んと心掛け居り、一昨年末に遂に我手に入れたる次第にて、目明きが盲目に教へられて宅地を買ひたり」。

そして、大正四年十二月二十七日の日記には、

「赤坂一ツ木町八十二番地伊東祐弘子（爵）地所三百五十三坪二萬四千圓にて買入れの登記本日終了、世話人田野金八に謝礼として金五百圓を遣はす」とある。

この赤坂の居宅にはさまざまな人が訪れているが、以下に興味ある来訪者を紹介する。

大正六年十二月十一日の日記には、「山縣老公の伽藍洞臨席」の見出しとともに、次のように記されている。

「正午、山縣老公及び同夫人、大倉象馬夫人、益田多喜子来宅、當日は老公の爲めに客間に満八十雪舟図焉の落款あ

る福祿寿を掛け、唐物洲濱形卓に古瀬戸銘寒月香炉を置きて之に名香白菊を薫じ、書院には蒔絵硯箱を飾れり」。

右の記述に続いて、高橋箒庵が細心に配慮した接待の様子が詳細に記されている。供応された懷石も、「老人向食物なれば、誠に理想的の懷石にして今日は有り難く殆んど其全部を盡せりとて、（山縣老公は）頗る気に入られたるやうなりき」とある。

一方、『箒のあと 下』には、「アインシュタイン博士の来庵」の項がある。

「大正十一年十一月二十九日午前十時、アインシュタイン博士が、茶式見学の爲め、夫人同道で、我が伽藍洞一木庵を訪はれた（中略）。本邦固有の茶色を研究したいといふので、福沢三八君の紹介を以て、当日来庵せられた（後略）」。

「博士の在邸時間が、一時間十五分に過ぎなかった」が、茶室におけるアインシュタイン夫妻の様子が興味深く描かれている。そして、「世界的大学者を自庵に迎へて、茶式の一端を説明する事を得たのは、私が一生中に於ける最も愉快なる出来事であった」と記されている。

この赤坂一ツ木の居宅は、太平洋戦争末期の空襲によって焼失した。敷地は戦後になって売却されているが、現在ではTBS本社 of 敷地内に含まれている。

十四、後期著述活動

実業家を訣別した高橋義雄は、精力的な著述活動に入っているが、当初は自著の出版のために箒文社を設立している。大正元年十一月二十四日の日記に次の記述がある。

「神田一ツ橋通りの馬場写真店に赴き店内の模様を一覧せり（中略）、箒文社用に適當するや否やを檢分の爲めなり」。そして、大正三年十一月二十一日の日記は次のように記されている。

「箒文社開始以来着手したる東都茶会記、我楽多箒、井伊大老茶道談の三部完成せしを以て、博文館に交渉して売却方を依頼せり。井伊大老茶道談及び我楽多箒は各千部に印刷し、東都茶会記は五百部印刷せり。各新聞紙に箒文社新刊書として二欄打抜きの広告を出す筈なり」。

更にまた、翌四年十一月十一日の項には、

「箒文社書籍小売業開店に就き、神田今川小路に新店舗を借入れ昨日移転せり、店頭準備次第開店の筈」。

箒文社の刊行物はいずれも高橋義雄の著作であるが、『井伊大老茶道談』は中村勝麻呂編として大正三年に刊行されている。

左の著作リストは、熊倉功夫ほか『東都茶会記 五』（淡交社 平成元年）所收の「高橋箒庵略歴および著作年譜」を参考に作成した。なお、各著作に付した番号は、前出（第三章）の「前期著作活動」に続く通し番号である。

(8) 『寸松菴色紙 紀貫之書』（田中親美との共編。繫薄堂 明治四十二年）

(9) — (10) 『東都茶会記 第一輯（上）（中）（下）』（箒文社 大正三年）

- (11) 『我楽多箴』 (籌文社 大正三年)
- (12) 『実業懺悔』 (籌文社 大正四年)
- (13) 『東都茶会記 第二輯』 (籌文社 大正四年)
- (14) 『へそ茶』 (籌文社 大正四年)
- (15) | (16) 『東都茶会記 第三輯 (上) (下)』 (籌文社 大正五年)
- (17) | (18) 『東都茶会記 (上) (下)』 (籌文社 大正五年)
- (19) 『水戸学』 (籌文社 大正五年)
- (20) | (21) 『東都茶会記 第四輯 (上) (下)』 (籌文社 大正六年)
- (22) | (23) 『東都茶会記 第五輯 (上) (下)』 (籌文社 大正七年)
- (24) 『東都茶会記 第六輯』 (籌文社 大正八年)
- (25) 『茶道茶器及陶磁器 書画骨董叢書第九卷』 (今泉雄作との共著 書画骨董叢書刊行会 大正八年)
- (26) | (27) 『東都茶会記 第七輯 (上) (下)』 (籌文社 大正九年)
- (28) | (29) 『庚申大正茶道記 (上) (下)』 (慶文堂書店 大正十年)
- (30) 『大正名器鑑 第一編』 (大正名器鑑編纂所 大正十年)
- (31) 『大正名器鑑 第二編』 (大正名器鑑編纂所 大正十一年)
- (32) 『辛酉大正茶道記』 (慶文堂書店 大正十一年)
- (33) 『大正名器鑑 第三編』 (大正名器鑑編纂所 大正十一年)

- (34)―(35)『大正名器鑑 第四編（上）（下）』（大名名器鑑編纂所 大正十一年）
- (36)―(37)『大正名器鑑 第五編（上）（下）』（大名名器鑑編纂所 大正十二年）
- (38)『葵亥大正茶道記』（慶文堂書店 大正十三年）
- (39)『山公遺烈』（慶文堂書店 大正十四年）
- (40)『甲子大正茶道記』（慶文堂書店 大正十四年）
- (41)『大正名器鑑 第六編』（大名名器鑑編纂所 大正十四年）
- (42)『平家納経副本』（敵島経副本調整会 大正十五年）
- (43)―(45)『大正名鑑 第七編―第九編』（大名名器鑑編纂所 大正十五年）
- (46)『乙丑大正茶道記』（慶文堂書店 大正十五年）
- (47)『丙寅大正茶道記』（慶文堂書店 昭和三年）
- (48)『昭和茶道記』（慶文堂書店 昭和四年）
- (49)『近世道具移動史』（慶文堂書店 昭和四年）
- (50)『茶道実演録』（慶文堂書店 昭和六年）
- (51)『遺香庵寄進顛末』（慶文堂書店 昭和六年）
- (52)―(53)『籌のあと（上）（下）』（秋豊園出版部 昭和八年）
- (54)『十二ヶ月茶の湯』（秋豊園出版部 昭和九年）
- (55)『平岡吟舟と東明曲』（秋豊園出版部 昭和九年）

- (56) 『福沢先生と語る』 (高橋義雄編 岩波書店 昭和九年)
- (57) 『趣味ぶくろ』 (秋豊園出版部 昭和十年)
- (58) 『茶道読本』 (秋豊園出版部 昭和十一年)
- (59) 『躍進の米沢』 (躍進の米沢社 昭和十一年)
- (60) 『天正・昭和北野大茶湯』 (秋豊園出版部 昭和十一年)
- 以下は、高橋箒庵没後の刊行物 (覆刻版を含む)
- (61) 『茶道本山記』 (三尾邦山刊 昭和十三年)
- (62) 『遠州蔵帳図鑑』 (共編 宝雲舎 昭和十三年)
- (63) (71) 『大正名器鑑 普及版 第一—九編』 (宝雲舎 昭和十六年)
- (72) (80) 『没後五十年記念 大正名器鑑 全九編』 (広峰社 昭和六十一年)
- (81) (88) 『萬象録 高橋箒庵日記 卷一—卷九』 (思文閣出版 昭和六十一年—平成三年 熊倉功夫ほか校注)
- (89) 『近世道具移動史』 (有明書房 平成二年 覆刻版)
- (90) (94) 『東都茶会記 一—五』 (淡交社 平成元年 覆刻版 熊倉功夫、原田茂弘校注)
- (95) (97) 『大正茶道記 一—三』 (淡交社 平成三年 覆刻版 熊倉功夫、原田茂弘校注)

右の著作リストに、若干の説明を補足する。

(一) (9) (10) 『東都茶会記 第一輯』、(11) 『我楽多箴』 など箒文社から出版された計十八点は、のちにいずれも慶文堂書店の出版物となっている。

(二) 実業家を引退したのち、「実業」に関する高橋義雄の著書は12『実業懺悔』のみであるため、その内容を紹介すると、次の各章によって構成されている。

実業志望の動機、実業調査の洋行、実業奉公の準備、三井商店の末歴、実業商店の奉公、実業社会の六雄、実業社会の八將、実業大家の言行（上）（中）（下）、実業生活の秘訣（上）（下）

「実業商店の奉公」には、「三越呉服店は如何にして今日の大を成したるか」が転記されている。雑誌『実業の世界』に掲載されたこの記事について、大正三年十二月十五日の日記に言及されていることは前出の通りである。なお、『実業懺悔』の内容は、全体として『箒のあと』の記述との重複が多い。

(三) (42)『平家納経副本』の奥付には、編集兼発行者 東京市赤坂区一木町八拾二番地 高橋義雄 発行所 一木町八拾二番地 高橋方 巖島納経副本調整会と記されており、大正十五年三月二十一日発行 非売品である。

同書の「あとがき」によれば、大正十四年十一月の巖島経副本完成とともに、「東京帝室博物館内表慶館に正副経巻並に副本奉納文を披陳」されている。そして、「副本調整発起者及び一般好事家に展示せんと欲し、副本の要部及び奉納文を撮影して発起者並に本事業を援助せられたる諸賢に贈呈せんとし茲に此写真帖を作成するに至れり」とある。調整者は古筆家として知られる田中親美であるが、巻末にイロハ順に列記された発起人には多数の実業家の氏名が見られる。岩原謙三、原富太郎、団琢磨、根津嘉一郎、山本条太郎、安川敬一郎、安田善次郎、馬越恭平、益田孝、藤原銀次郎、有賀長文、住友吉衛門など枚挙にいとまがないが、高橋箒庵の交友の一端を見る思いである。

(四) (52) (53)『箒のあと（上）（下）』は、昭和七年六月十八日から都新聞に連載されたのち新たに開業した秋豊園の最初の出版物として刊行されたことが、同書の序文に記されている。同社はその後も、秋豊園出版部の名称をもって

高橋箒庵の著作を出版している。この著作リストでは、秋豊園出版部の名称に統一した。

なお、右の『箒のあと』は、上布製特装版（上巻二圓五十錢 下巻三圓）に加えて、のちに、廉価普及版（上巻二圓八十錢、下巻一圓九十錢）が出版されている。

(五) (81) (88) 『萬象録 高橋箒庵日記』は、全九巻の構成であるが、第九巻の刊行が著しく遅れている。平成八年六月の現時点では、翌九年春の刊行予定と言われている。

高橋義雄が執筆した「三井中興事情」は、完成当初は非公開文書であったため右の著作リストには加えられていないが、極めて重要な著述である。現在、三井文庫所蔵史料（追二四四）として保管されている「三井中興事情」は、例えば、『三井事業史 本編第二巻』所収の「第六章 三井家改革の展開」などにも再三にわたって引用されているが、興味深い資料である。

箒庵の日記『萬象録』大正五年五月八日の項には「三井家中興顛末記述の依頼」の見出しとともに、この史料執筆の経緯が右のように記されている。

「午前、三井高保男（爵）を訪ふ、（中略）明治二十四年三井家が故井上侯指導の下に大改革を施して三井家中興の基を開き、幸に今日の盛運を呈したる其顛末を記録し置かんとすれども、当時の事情を熟知せし者は今や唯君（高橋義雄）引用者一人であるのみ、（中略）当時の始末を記述するは君が最適なるべし」。

そして、三井高保男爵との意見交換の結果、「三井中興始末と云ふが如き題目の下に、（中略）当事者の一人として大局より事実の記録を作る」ことにしたが、「今日に於ては勿論印刷して公衆に示すべきものに非ざれば、遠慮な

く記述して後日の参考に資せざる可からず、其辺宜しく取捨あるべし」との、三井高保の意向を記している。

こうして、大正六年の日記には、三井中興事情の調査及び執筆に関する記述が散見される。そして、翌七年八月七日の日記には、

「午後二時、三井高保男（爵）を訪ふ。（中略）。三井中興事情略（ほ）ぼ脱稿したる由告げたるに、今日の（三井家）同族子弟は明治二十年前後三井の窮状を夢にも知らず惰氣慢々たるが故に、子孫の教訓の爲め当時の事情を記録したる者を得るは誠に悦ばしき事なりとて種々回憶談を試みられぬ」。

そして、同月三十一日の日記には、

「三井中興事情秘録及び三井家見聞談初度淨写成る、因て之を通覧校訂す」

とあるが、その後も数回にわたって「三井中興事情秘録淨写本を檢閲す」と記されており、入念な校閲がうかがわれる。かくして、同年十二月三十一日の日記には、次の記述がある。

「男爵三井高保氏より、

先頃は御骨折に依り三井中興史完結致し、中々大部に相成候間、筆の毛も切れ候事と存候間、鹿末の筆に候へ共一本進呈申候、御笑納被成候はば本懐の至りて存候

とて遠州旧藏唐物青貝一本に奉書一箱を添へて贈らる」。

三井高保は、三井同族本家六家の当主の一人である。明治二十四年に三井組大元方改正取調役主務者に就任しているが、大正九年まで三井銀行総長あるいは社長として三井同族のなかでも重きをなしていた。「三井中興事情」の完成は、高橋箒庵を起用した高保の信頼に充分に応える仕事であった。

十五、山県有朋との親交

実業家を引退して、その雅号箒庵に相応しい閑雅の生活に専念していた高橋義雄であるが、慶応義塾評議員あるいは能楽協会理事などの名誉職にはとどまっていた。その一方で高橋箒庵の交友関係は、政治家、実業家、学者文人、美術・芸能関係者など多岐にわたっており、華麗と形容しても良いだろう。

高橋義雄の三井入りの契機となったのは、井上馨の推挙によるものであるが、その後も有力政治家との交際は続けられていた。特にその老年期にあっても隠然たる影響力を失わなかった元老山県有朋との親交は良く知られているが、この老公が箒庵の伽藍洞一木庵を訪れたことについては既に触れている通りである。

大正六年二月十二日の日記には、「山県公の政党談」の見出しがある。その日の高橋箒庵は、山県公の要請によって小田原の古稀庵を訪れている。そして、この時の山県公との面談の内容が詳細に記されているが、箒庵に対する衆議員議員立候補の要請である。

明治二十三年、山県有朋が総理大臣に在任していた頃、高橋箒庵の同郷の「友人たる渡辺治等到大成会なる者を組織せしめて其頭数八十人に達」した。しかしながら、その後「渡辺等の歿後、後継者其人を得ず、大成会も遂に廃滅に帰し」た。

一方、山県有朋が持ち続けていた政党政治理念は、「三分鼎立」である。

しかるに、「今度の総選挙後政友会と憲政会と議員の総数が畧ぼ相対立するものと見れば、爰（ここ）に実業界の一団体を組織し、恒心ありて金銭の爲めに其意見を左右せられざる紳士的議員が、邪を避け正に就き中立の位置に立

（つ）て政界に主きを爲す事を得べし。益田孝等も頻（しきり）に此点に注意し、（中略）就ては此際迷惑ながらも君も議員と爲りて実業団体に加入せん事を切望する次第なりと言ふ。右の談論は各方面に亘りて殆んど二時間に及び」とある。

更に、同日の日記には「議員候補の決心」の見出しとともに、「右に対して此程郷里の友人共より今度の議員に候補者として打って出づべしなど勧誘されども」と記されている。察するに、山県有朋の要請以前に、高橋箒庵を議員立候者に擁立しようとする動きがあったようである。

これに対して、高橋箒庵は自分の気持ちを次のように記している。

「余は明治四十五年より文人生活に入りて筆硯に親しむ身と爲りたれば、人に対して何等の恩怨を結ばず自由に其意見を聞き、其風采を写して現代を後世に紹介せんとして社会各本面に入出し居る次第なれば、余一個人としては自から政局に立たんとするなど思ひも寄らず、随（したが）つて如上勧誘に対しても亦断然之を拒絶したれども、老公とは明治二十三年間思眷を蒙りたる関係もあり、今老公が其衷心を打明けて何等腹藏なく余に語らるるを聞きては、余としては幾分たりとも其（その）憂ひを分（わか）たんが爲め一臂の力を盡（つく）さざる可からずと衷心深く感動せしにぞ、更に郷里の友人等に諮り幸ひ目的を達し得る機会を捕捉する事を得ば進んで競争場裡に立つ事と爲さん、先ず夫れまでは猶予を得て右等交渉を畢（おわ）り次第更に決心する所あるべしと答へぬ」。

一方、古稀庵老有朋の署名があり、高橋箒庵賢兄宛とした二月十七日付の山県の書簡には、次のように記されている。

「拜啓過日御來庵の切御熟談相試候件に付き、爲邦家御発憤御決意の情拝承安心（後略）」。

しかしながら、この時の水戸選挙区状況からみて、「余は候補を断念することに決した」と、二月十八日の日記に記している。

結局、二月二十日付の山県有朋宛書簡には

「（前略）久しく墨染の衣を纏ひたる小生閣下多年の知遇に酬い、聊（いささ）か国家の深憂を分（わか）たと奮励一番忽ち還俗の念を生じ候次第に御座候」

と、自からの気持を記している。しかしながら、政友会が擁した対立候補が優勢であることから、水戸市より「選出せらるる事不可能と相成候えば、折角の奮発も終に水泡に帰し候かと大に悲観致居候」と、立候補断念の止むなきを伝えている。

衆議議員立候補に関して、高橋箒庵の本心はどうであつただろうか。山県有朋の慫慂もあり一時的には心が動いたとしても、結局の所、いまさらながら政治の世界のわずらわしさにかかわることを避けたかつたのではないだろうか。ところで、山県有朋に対しては冷酷な権力者と言ったイメージが抱かれており、民衆に人氣が無かつた政治家と言うのが一般的な評価である。しかしながら、箒庵高橋義雄との親交には、山県の別の一面がうかがわれるようである。

十六、『大正名器鑑』と『近世道具移動史』

箒庵高橋義雄が最初に茶室入りしたのは、三井銀行本店に勤務していた明治二十五年十二月下旬である。非黙、また無爲庵とも号していた益田克徳に招かれた高橋は、「生来初めての茶室入りを爲し」ている。克徳は益田孝の次弟

であるが、早くから茶道に入っていた。これを発端に、「終生茶煙に捲き込まるるに至ったのである」と、高橋箒庵は『箒のあと』で述懐している。

明治三十一年に麴町一番町に新宅を営んだ時は、茶室及び露地の設計を益田克徳に依頼している。また、由利公正子爵から「其邸内に在った寸松庵と云へる、三疊台目の茶席を譲り受けた。此茶席は寛永の昔、徳川三代將軍の茶道師範であった、佐久間將監真勝が、京都柴町大徳寺境内に創建した者」であると箒庵は茶室の由来を『箒のあと』に記している。

更に明治三十四、五年頃と思われるが、新たに三百坪の隣接地を得た箒庵は新しく茶室を建てているが、寸松庵よりも狭い「侘び茶席」である。庭は「塩原箒川の景色を写し」、このため「新茶室を箒川庵と名（づ）けた」。しかしながら、「此庵号を彫刻せんとするに当り、三字にては字形の納まりが面白くないので、遂に川の字を除いて、箒庵の二字となしたのである」。こうして、箒庵が高橋義雄の雅号となった経緯については、既に触れている。

「いろいろな縁故を辿り行けば、之に関する故実は頗（すこぶ）多く、（中略）禅宗に於ては、無形の箒を以て、心の塵を払ふと云ひ、又詩歌にも、之を詠じた者が少くなく」と、「箒庵」の雅号に満足している。そして、箒庵の号が何の遠慮もなく用いられるようになったのは、実業界に訣別後のことであろう。

箒庵を号していた高橋義雄は、残された二十七年間の生涯において、茶道及び茶道具に関する研究に本格的に取組んでいる。「第十四章 後期著述活動」で触れたように、明治四十五年以降の箒庵には、茶会記あるいは茶道具に関する数多くの著述がある。なかでも、箒庵の仕事として現在でも高く評価されているのが、『大正名器鑑』である。

大正五年二月五日の日記には、『大正名器鑑』の着手に至る高橋箒庵の抱負が簡潔に記されている。

「余は豫て自から企図する所あり、さまでの大金を要せざれども余一個の事業としては聊か重荷に堪えざる者あり、即ち今より百年前松平不昧公が古今名物類聚を著述したる如く、今日に於て天下の銘物を調査し、一品々々に就きて出来るだけ精巧なる図画を作り、又十分なる説明を附して、縦令(たと)へ其實物の後末損失する事あるも略ぼ其原形を想像せしむるまでに置きたき者なり」。

一方、『箒のあと 下』の「大正名器鑑の編著」の項には、次のように記されている。

「松平不昧は、徳川の親藩たる其上に、十八萬石の資力を傾けて、編纂したるにも拘らず動(やや)もすれば実物を目撃する事を得ず、唯伝説に依つて記録を作成したので、調査上正確を缺きたる世の中とて、覽者をして其実物を髣髴せしむる能はざるの憾みあり(後略)」。

松平不昧公が九年間を費して編纂した『古今名物類聚』十八冊は、「茶人の金科玉條とする所である」が、必ずしも充分とはいひ難い。そこで、高橋箒庵は、

「一学究の独力を以て、満足なる名物記を完成するは、如何に便利な世の中でも、容易な事ではあるまいとは思ひながら、奮つて此事業を仕遂げて見たいと思ひ、私が五十一歳を以て実業界を隠退したのも、一半は之を實現せんとする爲めであつた」。

一方、大正六年六月十三日の箒庵日記には、「大正名器鑑編成着手」の見出しとともに、次のように記されている。

「松平直亮伯を訪ひ、来る十一月より大正名物鑑編成に着手の顛末を語り、此事たる、不昧公が古今名物類聚を編纂たる遺志を継ぎて、当代相応の名物鑑を編成せんとする者にて(中略)、最初に松平家の重宝より着手したき所存なれば、此儀豫め伯(松平伯爵—引用者)の承諾を得んが爲め、今日態々(わざわざ)推参した次第なりと述べた(後略)」。

これに対して、松平伯爵は、「松江の別邸倉庫に在る者は其都度当地に取寄せて御覧に供覧すべしと快諾せられぬ」。
ふたたび『箒のあと 下』に戻ると、次の記述がある。

「私は引続いて徳川三家の名器を拝見し、夫れより島津、毛利、前田、浅野、細川以下旧大名家、若くは民間大家を歴訪して、茶入の持主壹百人に対して、品数四百三十六點、茶碗の持主壹百十八人にして、品数四百三十九點の調査を終り、実行期に入った大正六年より爾後足かけ十年を費して、大正十五年十二月、全国現存名物茶入茶碗の編纂を完了し、茶入部五編、茶碗之部四編を印刷して、之を大正名附器鑑と名附けたのである」。

その後、引続き其再版に二ヶ年を費したので、昭和三年九月、漸く之を完成し、一部を天皇陛下に奉獻し、更に久邇宮殿下にも之を献納する光榮を辱うした」。

昭和四年に至り、「根津青山翁等主唱の下に、益田鈍翁、馬越化生、団狸山、原三溪、諸先輩が賛同して（中略）四月十七日、東京会館に於て、箒庵翁慰労会なるものを催され」た。右にその雅号が記された根津嘉一郎、益田孝、馬越恭平、団琢磨、原富三郎はいずれも当時の有力実業家であるが、美術愛好家あるいは趣味人としても知られていた。

『大正名器鑑』の初版は、和装本九冊が二列に並んだ四段及び五段の引出しのついた木箱のなかに収納された豪華な体裁である。この仕事を独力で成し遂げた背景には、三井系企業の役員を歴任した高橋箒庵に対する高い社会的評価と、華麗な交友関係があったとは言うまでもない。単なる美術愛好家では達成し得ない業績である。

ところで、『大正名器鑑』には各名器を撮影した写真とともに、高橋箒庵が執筆した「実見記」が収められている。この「実見記」だけを抜き出して、小田榮一編『大正名器鑑実見記』が平成八年三月に淡交社から出版されている。

また、これと相前後して、近藤道生『茶のころ』（新潮社）が出版されているが、「名物茶入れ・茶わんめぐり―『大正名器鑑』を軸にして」と「『万象録』を読む」の二篇が収められている。偶然ではあるがほぼ同じ時期に、しかも歿後六十年近くが経過して高橋箒庵が再評価されているのは興味深い。

昭和四年に出版された『近世道具移動史』も名著として現在も高く評価されており、平成二年に有明書房から覆刻版が出版されている。『大正名器鑑』に続くこの書では、幕末期以降のわが国における茶道具の移動が詳細に追跡されている。

江戸期以前から大名諸名家に所蔵されていた道具類（ここでは、広い範囲にわたる古美術品と解して良いだろう）は、明治期に入って移動している。そして、この時期にあって富を蓄積していった実業家達が、有力な美術収集家の役割を果たしていたことは言うまでもない。特に、大正期以降には、諸名家が手放す道具類の入札が数多く開催されているが、『近世道具移動史』には各入札会の記事及びそれに伴う道具類の移動が詳細に網羅されている。

こうして高橋箒庵は、茶道具の名品が最も烈しく移動した大正時代を四期にわけており、名家の入札売立会の模様から落札価格に至るまで克明に記録している。なかでも、「大正五年五月十六日仙谷伊達家の入札」から「大正九年四月十九日土井子爵家の入札があった時期までを、余は道具移動第三期中の成金時期と名づけやうと思う」と、箒庵は記している。この『近世道具移動史』について、「日本近代経済史の傍証資料として、きわめて重要な文献として、現在も珍重されている」と、臼井史朗『昭和の茶道―忘れ得ぬ人』（淡交社 平成五年）は評価している。

ところで、『近世道具移動史』の最終個所で「道具に於ける鶴の眞似」と題して、高橋箒庵は自からの道具蒐集を次のように語っている。

「道具らしき道具を買ひ出したのは明治二十四年三十一歳で三井銀行に奉公した時からで最初に同行の抵当物と爲て居た河村傳衛家の掛物類を買」った。やがて、「病己（すで）に膏盲に入り当時のレコード破りで光信下絵廬屋馬地紋釜を三百五十拾圓で買取った程に向上して居た」。

そして、松平、溝口両伯爵家及び「その他諸名家より或は数十点或は数百点を一纏めにして小向ひに譲り受けた道具の数量は殆んど其際限を知らず其代金の如きも亦一廉の巨額に上り近年雲州松平家の道具譲受に際しては一箇年と三ヶ月間に百三十五萬圓に達した事さへあった」。

「扱て斯く多量の道具を買入れて其俣（そのまま）之（これ）を愛蔵し置くは固より余の望む所であるが、是れは余の資力の及ぶ所に非ず。是（ここ）に於て随（したが）て買へば随って用ひ又随って之を売り鑑識の進み好尚の変るに随って（中略）道具の売買授受を行っている」。こうして、「鑑定力だけは可なり養成した積りである」と自負している。

既に充分な財産を形成していた高橋箒庵であるが、その頃親交を重ねていた富裕な実業家達に比べると、彼の資力は限られていた。このため、折角の「秘蔵の品々までも亦同時に吐き出さざるを得」なかった。それはまるで、「鵜が魚を唧（くわ）へて一旦其喉（のど）を通せど永く腹中に蓄ふるを得ずして再び之を吐き出させらるるに異らず、是れ余が道具に於ける鵜の真似にして」と。自からを軽くいなししている。

ともあれ、明治維新时期以降昭和初期に至る道具類の移動を克明に記したこの書は、四百四十頁に及んでいるが、高橋箒庵しか爲し得なかった著述である。

『大正名器鑑』、『近世道具移動史』に加えて、高橋箒庵は数多くの茶会記を出版している。明治四十五年（一九

一二から「時事新報」に有力実業家達の茶会記を連載しているが、のちに単行本にまとめられている。『東都茶会記』、『大正茶会記』、『昭和茶会記』、『茶道実演録』として出版されているが、あわせて二十冊を越えている。このうち、『東都茶会記 全五巻』及び『大正茶道記 全三巻』が淡交社から覆刻版されていることは、『第十四章 後期著述活動』において既に触れている。

右に述べた数多くの著作は、茶道研究者そして美術収集家である高橋箒庵の面目を如実に示しているが、彼はまた茶道関係古書の秀れた収集家でもあった。彼が集めた茶道関係の和書約八百点が、高橋箒庵文庫として慶応義塾大学図書館に所蔵されている。この高橋箒庵文庫は、箒庵の歿後昭和十三年に高橋家から寄贈された蔵書及び、それに先立って昭和四年に朝吹常吉から寄贈された朝吹英二の茶道関係の蔵書によって構成されている。これらの蔵書に関しては、慶応茶道会編「高橋箒庵文庫目録」（昭和二十八年作成）があるが、茶道研究者にとっては、いずれも貴重な文献とされている。

十七、息子忠雄

明治四十二年、高橋義雄は妻千代子に先立たれている。二人は子供に恵まれなかったため、横浜貿易商会常務山田松三郎の三男を養子に迎えていた。翌四十三年、平岡熙の次女楊子と再婚しているが、井上馨侯爵夫妻が媒酌人となっている。

岳父平岡熙に触れた一文が、『箒のあと 上巻』にある。それによれば、明治四年に十六歳の平岡は渡米している

が、駐米公使森有礼と同じ船である。先ず、アメリカの小学校を終えてハイスクールに学んだのち、平岡はキンクリー機関車製造所で職工として三年間働いた。明治十年に帰朝しているが、当時の工部卿伊藤博文の推挙により工部省三等出任となった。明治二十年には工部省を辞したのち造兵工廠の一部を借りて汽車製造を開始したが、日清戦争時には兵器製造に従事した。その後、本所において車輛製造工場を起こしている。組合事業として出発したが、やがて単独経営とし平岡工場と称した。

その頃から、日本各地において鉄道敷設が活発となり、平岡も巨額の利益を得ることになった。こうして、平岡大盡と呼ばれ、派手な茶屋遊びや、九代目市川团十郎の後援など趣味人として知られるようになった。

倉田喜弘ほか編『日本芸能人名辞典』（三省堂 一九九五年）には、平岡吟舟の名で記載されており、邦楽東明流の創始者として紹介されている。明治三十五年頃から「大磯八景」ほか三作を作曲したことが記されているが、昭和九年に七十八歳で歿している。

この『日本芸能人名辞典』には、東明柳舟の項があり、邦楽東明柳流の分家家元（初代）と紹介されており、「明治十五年（一八八二）—昭和二十四年（一九四九）三月二十日」とある。更に記述を引用すれば、「明治後期—昭和初期に活躍。本名は高橋楊子。平岡吟舟の次女。夫は高橋箒庵。繊細な芸風で、清元寿兵衛や常盤津菊三郎らの三味線奏法に影響を与えた。夫箒庵の作詞になる『花の心』、『此君』（このきみ）ほか約三十曲を作曲した」。

前出の『日本芸能名辞典』には、「高橋箒庵」の項もあり、次のように記されている。

「文久元年（一八六一）八月二十八日—昭和十二年（一八三七）十二月二十日。明治期の実業家。邦楽東明流の作詞者。妻は初代東明柳舟。東明流『都鳥』、『柳』、『苦舟』ほかを作詞した。（著書）『平岡吟舟翁と東明曲』一九

三四年」。

一方、『箒のあと 上巻』に「家庭の音曲」の項があり、箒庵は次のように記している。

「私が、又無上に此音曲を好んだので、(中略) 左れば後妻を選ぶに当り、第一条件として、先ず音曲の趣味ある者をと云ふので、伝統的音曲の家庭を有する平岡熙の次女が、許婚の相手の病歿に依り、偶然婚期の遅れて居たのを迎ふる事とし、爾来、より以上に家庭が音曲化するに至ったのである」。

かつて洋行した時、高橋義雄が接した欧米の家庭には「ピアノ其他の楽器を備へざる者なく、(中略) 家庭に洋々たる和氣を漂はす其有様を見て、如何様、家庭に音曲の必要なるは此処なりと自覚した」。

五十歳に達した高橋義雄が、二十九歳の楊子を新しい配偶者に迎えたその翌年(四十四年)十月二十六日に初めて子供に恵まれている。同じ十月に箒庵は王子製紙専務取締役を辞任し、実業界に訣別している。

「思ひ掛けなく私は一男児を得た処が、媒酌人たる井上侯は、一昨年伊藤(博文)が哈爾賓で亡くなった日に、君の息子が生れると云ふのも妙であるから、自分が名附親と爲ってやらうが、君は義だから、倅を忠として、忠雄と云ふのが宜からうとて、奉書に麗々と認めて届けられた(後略)」(『箒のあと 上巻』)。

約二十年間をともに暮らした先妻千代子との間に子供に恵まれず、五十一歳にして初めて男児を得た箒庵の喜びは、この上もなく大きかった。高橋箒庵の日記『萬象録』には、息子忠雄に関する記述が散見されるが、父親の細やかな愛情が読み取れる。

音楽を愛する家庭に育った忠雄は、父箒庵の自由な教育によるものであろうか、早くからピアノに親しんでいたが、のちに中南米音楽の解説者として知られるようになる。日外アソシエーツ株式会社編『ポピュラー音楽人名辞典』(

紀伊国屋書店（一九九四年）の「高橋忠雄」の項には次のように記されている。

「音楽評論家。明治四十四年東京生まれ。歿昭和五十六年二月十一日。慶応義塾大学卒。慶応在学中の昭和七年日本初のタンゴのバンド『モンパルナス・タンゴ・アンサンブル』を結成。日本の中南米音楽の草分けとなる。戦後も放送用の楽団結成。ディスクジョッキー、『東京コンガ』（山口淑子歌）ほかの作曲などを通して、中南米音楽の普及に尽くした。父は高橋箒庵（茶道研究家・三井合名理事）」。

昭和二十年代後半の日本では、アルゼンチン・タンゴが高い人気を集めていた。早川真平が主宰する「オルケスタ・ティピカ東京」を筆頭に、国内の主要都市では盛んにアルゼンチン・タンゴが演奏されていた。こうした演奏会の司会者として人気があったのが高橋忠雄と高山正彦であった。その頃、アルゼンチン・タンゴ及び中南米音楽の解説者として、高橋と高山の二人が最も良く知られていた。

ここで、筆者の極めて個人的な追憶を許していただくことにする。前述のように戦後の混乱が落ち着きを見せるようになった昭和二十年代の後半にあつては、アルゼンチン・タンゴをはじめラテン・アメリカ音楽が当時のポピュラー音楽の世界で主流の一つとなっていた。昭和二十八年に大阪外国語大学に入学してスペイン語を専攻した筆者は、たちまちラテン・アメリカ音楽の熱心な愛好家となった。その頃、解説者としてNHKの中南米音楽を担当していた高橋忠雄及び高山正彦両氏の番組を、私は毎回欠かすことなく熱心に聴いていた。お二人とも、もの静かで極めて知的な語り口であったことが、今も印象に残っている。

なお、高山正彦も昭和五十二年に歿しているが、東京帝国大学文学部卒。新聞記者、公務員、英語教師を経て昭和二十八年に音楽評論家として独立したと、前出の『ポピュラー音楽人名辞典』に記されている。

ところで、タンゴがブエノスアイレスの安酒場で誕生したのは一八七〇年頃とされている。一九一〇年代に至ってようやく多くの人々に迎え入れられるようになり、一九一三年にはアルゼンチン・タンゴを演奏するオルケスタがパリに渡っている。そして不朽の名作と言われる「ラ・クンパルシータ」が世に出たのが一九一四年である。

一方、高橋箒庵の日記『萬象録』の大正三年（一九一四）六月十三日の項には、「長唄及びタンゴ踊」の見出しとともに次の記述がある。その日の夜、箒庵は有楽座の長唄研精会に赴いている。

「午後十時より同座に亜米利加人レクター等の独唱及びタンゴ踊あり、序に見物せしがレクター氏のピアノに合せての独唱は余等には其巧拙を判断する能はされども、さまで感心すべき処なし。独唱後亜米利加婦人とレクター氏と手を引き合ひて数番の踊を演じたる中にタンゴ踊と云ふものあり、ピアノに合せて男女足並みを揃へて踊るにて其足並みの美事に揃ふ処が特色なり、されど唯二人の足並みが揃ふだけにて数番同一形なるは少しく見物人を倦ましめたり」。

右の引用は、極めて簡単ながらわが国においてタンゴに関する最初の記述と考えて良いだろう。

十八、晩年

五十歳にして新しい人生に踏み込んだ箒庵高橋義雄の生活が如何に充実していたかを、これまでに辿ってきた。彼の日記『萬象録』からうかがえる箒庵の生活は、極めて多忙であり、精力的に残りの二十七年間を生きている。人生五十年といわれていた当時において、高橋義雄は大正十五年に次男敏雄を、昭和二年には長女芳子を得ている。大正

十五年と言えば壽庵六十六歳、昭和二年は六十七歳である。

昭和十年三月には、株式会社三越の取締役に就任しているが、同十二年十二月に歿する迄の二年十カ月間にわたってその職にあった。三井呉服店時代に理事に就任した明治二十八年から数えて四十年ぶりの復帰であるが、高橋義雄は既に七十五歳に達していた。

昭和十年九月末、三越本店の増改築が完成しており、新たな飛躍が期待されていた。同じ時期に、三井物産砂糖部長桜井信四郎及び三越仕入部長飯野三一が取締役に選任されているが、三越の業容拡大のために高橋義雄の社会的地位と華麗な人脈が必要とされていたのだろうか。いずれにせよ、七十五歳と言う高年齢での取締役就任は異例である（もっとも、昭和十四年三月に小林一三が六十七歳で三越取締役に就任している）。高橋義雄の異例の取締役就任の背景を明確にする資料は、三越資料室にも残されていない。

ところで、白柳秀湖『中上川彦次郎傳』の初版が岩波書店から出版されたのは、昭和十五年である。その前年に、「原版（非売品限定版）」が発行されているが、その「巻頭言」には同書の出版に至る経緯が記されている。それによると、著者の白柳秀湖は「昭和十一年三月六日、三越樓上に催された」中上川彦次郎伝記編纂「委員の午餐に列席し、高橋義雄」ら関係者と初顔合せしているが、更に次のような記述がある。

「茶の湯・骨董の方面で、実は傍にも寄りつけぬ人のやうに誤解して居た高橋義雄氏が存外に自分（白柳秀湖―引用者）の著作と文学界に於ける自分の特殊な立場をよく諒解して居て下さったことも大きい意外の一つであった。高橋氏はその後、自分達夫婦をしばしば赤坂一ツ木邸の晩餐会に招待して下さったり、舞踊会に招待して下さったりしたほどで、遠くから想望してとても寄りつけぬ人のやうに思つて居た氏の風格に対する想像が、初対面の日から全く崩

れてしまった」。

同書の第十六章「『時事新報』の創刊並に経営」の項には、「(昭和十一年五月七日、赤坂一ツ木の邸宅にて高橋義雄談)」と注記されている。昭和十一年と言えば、高橋義雄が七十七歳で歿する前年であるが、時事新報時代からの上司であった中上川彦次郎の伝記編集に熱心であったことが、うかがわれる。

晩年期にあった高橋箒庵の仕事として、東京中央放送局の教養番組に出演して「十二ヶ月茶の湯」の講話を担当している。昭和八年二月から翌年三月まで毎月一回放送されたこの講話は、「十二ヶ月茶の湯」として昭和九年四月に秋豊園出版部から刊行されている。

更に、この頃の箒庵高橋義雄は、昭和十一年十一月に創元社から刊行された『茶道全集 全十五巻』の編集に協力している。この全集の編纂顧問は高橋箒庵と正木直彦であるが、その「巻の一」には、「茶道直念」と「明治大正茶道逸話の中より」と題する箒庵の論稿二篇が収められている。この二篇が、いつ執筆されたかを特定出来ないが、箒庵がこの『茶道全集』編纂に関与していたのは、彼の年齢七十五歳前後の時期であったと推定される。

豊臣秀吉が北野大茶湯を開いた天正十五年から数えて、「当昭和十年は、恰(あたか)も三百五十年に相当するを以て、北野神社に於ては、此程北野大茶湯三百五十年記念献茶会なる者を發起し、前田利爲を名誉会長」にいただいたことが、高橋箒庵『天正昭和北野大茶湯—古今茶道の対照』(秋豊園出版部 昭和十一年)に記されている。そして高橋義雄、清浦奎吾伯爵、大谷尊由、京都府鈴木知事ら七名が名誉顧問に選ばれている。

箒庵はその年(昭和十年)十月八日夜九時に東京を発ち、翌朝午前七時に京都に到着している。今日ほど遠距離旅行が容易でなかった当時あっては、七十六歳の箒庵にとって決して楽な旅ではなかったと思われるが、翌十一日に

は彼の講演会が開かれている。更に、その翌年には、二百頁に及ぶ『天正昭和北野大茶湯』を出版している。ともあれ、箒庵高橋義雄は、早々と実業界に訣別して自から選んだ人生を思いのままに生き抜くことができた、数少ない人物である。

注

(1) 加藤弘之は哲学者として知られ、東京帝国大学総長、帝国学士院長などを歴任した。『萬象録 第四卷』大正五年二月九日の日記には「加藤弘之男薨去」の見出しとともに、次の記述がある。

「枢密顧問官男爵加藤弘之氏（中略）本日薨去せり。（中略）本国独逸学の開祖たり。明治十七年頃進化論を著したる時は、大学教授外山正一氏等を始め一世を挙げて烈しく之を論難せしが、是れは当時政府が民権論を抑圧せんとせしを、氏は学説に托して陰に賛助せし者なりとして此論難を招きたるなり。其頃の事なり、余が日本人種改良論を出版するや、博士は或る雑誌に一篇の辯駁説を掲げしかば、福沢先生は機大に乗ずべし十分に論争するが宜いと奨励せられ余は篇を重ねて氏の論難を反駁したる事あり。其後一度男（加藤男爵―引用者）に面して福沢先生に関する男の所見を叩かんと思ひつつ未だ果たさざる間に遂に薨去されたることは遺憾なり（後略）」。

(2) 村上信彦『大正期の職業婦人』（ドメス出版 一九八三年）の「職業婦人の実態」の章の一節を構成する「事務員の歴史」に次の記述がある。

「わが国で最初に女の事務員が採用されたのは、私の知るかぎり明治二十七年の茨城県河内郡竜ヶ崎役場と大阪の三井銀行支店であった。次いで明治三十一年に日本銀行が計算係に、三十二年安田生命保険会社が保険掛に女を採用した」。

(3) 『三井事業史 資料篇三』に「三井家同族決議録」が收められている。そして、明治二十八年七月二十二日開催の「三井家同族会議事摘要」には、「三井呉服店理事高橋義雄月給金貳百円」と記されている。熊倉功夫ほか編『東都茶会記 五』巻末の「高橋箒庵略歴および著作年譜」には「明治二十八年十一月 三井呉服店理事に就任」とあるのは、訂正の必要がある。

(4) 三越の宣伝誌「三越」大正二年十一月号（第三卷第十一号）に「江戸時代の模様物について」と題する講演筆記が掲載されている。

三越呉服店が主催していた「流行会」における講演であるが、講師は文学士斎藤隆三である。『三越沿革史』の編者斎藤隆三と同一人物であることを三越資料室宮崎正彦氏に御教示いただいた。斎藤隆三の経歴は不明である。

(5) 註(2)で引用した村上信彦『大正期の職業婦人』所収の「職業婦人の実態」には「デパート店員」の項があり、次のように記されている。

「デパートが女店員を採用するようになったのは、まだ三井呉服店と名乗っていた三越が試験的に三名使用したのが最初で、明治三十七年、三越と改称したとき三十名採用してから定着した」。

その後、明治末期から大正期にかけて、他の百貨店においても女店員の採用が徐々にひろがっていった。

(6) 「時好」は、単なるPR誌以上に、雑誌としても広く読まれていたようである。

戦前期の少年雑誌界の王者として知られていた軍事冒險小説作家山中峯太郎の『自舒伝 否』には、彼の青年期が描かれている。陸軍歩兵少尉時代の峯太郎は、女性問題に悩み奈良県吉野の山奥にあった古寺如意輪寺に籠っている。その時、『時好』という雑誌のグラビヤページを何気なく眺めていて、恋人そっくりの女性の写真を眼にしたが、それは「大阪の某実業界の令嬢のポートレート」であった。以上は尾崎秀樹『評伝山中峯太郎 夢いまだ成らず』（中公文庫 一九九五年）に引用された『自舒伝 否』によるが、

「時好」が広い範囲にわたって配布されたことを示す資料と言えるだろう。

(7) 鐘ヶ淵紡績に入社した室田義文は、のちに大正四年から昭和十三年に至るまで同社監査役に在任している。その間、大正十年には大日本人造肥料株式会社取締役会長に就任している。

(8) 大正四年十月一日の日記に、「箕面電気鉄道会社株五百株一株五円金二千五百円を鹿島銀行支店に、王子製紙会社新株二百七十株一株七円五十銭金貳千貳拾五円を三井銀行に払込んだ」とある。

「箕面電気鉄道会社」は、正しくは箕面有馬電気軌道会社である。明治四十年に設立されているが、三井銀行大阪支店時代の高橋義雄の下僚であった小林一三が同社の実質的な経営者であった。現在の阪急電鉄の遠い前身である。

終りに

企業と文化の關係は、興味あるテーマである。明治期以降のわが国にあって、資力に恵まれた美術収集家はいずれも企業経営者であり、現在においても有力な美術館の創始者は経済人として名をなした人々である。

その一方で、極めて少数ながらも文人あるいは文化人として知られた経済人の存在がある。江戸期の大坂にあって町人学者と言われた人々も、その系譜に属するだろう。そして、文人実業家と言うべき存在は、明治以降現在に至る迄も続いている。こうした文人実業家の系譜を系統的にたどってみたいと考えているがとりあえず、篠庵高橋義雄の事蹟をまとめたのが本稿である。

高橋義雄が実業家として生き抜いた明治と言う時代は、わが国の近代史が始まった時期であるが、いささかの郷愁をもって顧みられる時代でもある。そして司馬遼太郎は、「幕末から明治初年にかけては、歴史風景として水平線のむこうのことでなく、われわれにとって可視世界の風景である」と、『街道をゆく 十七』に書いている。

私自身も、明治と言う時代にいささかながら親近感を抱く世代に属しているが、ひきつづいて明治期以降の文人実業家の系譜を辿ってゆくのをこれからの仕事としたい。

なお、本稿の執筆にあたっては、篠庵高橋義雄の御令嬢であり裏千家茶道教授桜井宗梅、慶応義塾大学図書館貴重室白井克、株式会社三越資料室宮崎正彦の各氏に懇切な御教示をいただいた。また、資料の収集と整理には桜美林大学講師児玉悦子さんの協力を得たが、茶道関係の資料では清泉女子大学勤務相京三千代さんの協力を得た。

参考文献

参考にした資料及び、引用させていただいた文献は、いずれも本文並びに注に明記しているが、更に次の各書を参考にした。

長井実編『自敍益田孝翁伝』（中公文庫 一九八九年）

筒井紘一ほか『益田鈍翁 風流記事』（淡交社 平成四年）

三宅晴輝『小林一三傳』（東洋書館 昭和二十九年）

梅本浩志『三越物語』（TBSブリタニカ 一九八八年）

（本学兼任講師）